324
368

パウロ傳

始

使徒保羅傳

2. 12. 15
內文

LIFE OF PAUL

使徒保羅傳

松永文雄著

基督教興文協會發行

東京銀座 教文館

『保羅傳』は、基督教興文協會の發行する所に係る。

本協會の事業は、下文に定むる如し、曰く、『基督教興文協會の事業は、日本の基督信徒及び未だ基督教を信せざる人々の需要に適したる基督教文學の著作及び弘布にあり。本協會は日本に在る基督教ミッションの同盟を代表せるが故に、公同的精神を以て立てるものなり。されば本協會の會員及び維持者は、必ずしも本協會に於て發行せる書籍に現はれたるすべての意見に同意せるものと認むべからず。』

序言

世界の宗教歴史の中で非凡な靈的天才であつた使徒保羅は深遠な思想と熱烈な信仰と雄大な事業と高貴な人格とを兼備して居た。彼が古代と中世と近世とに於ける各時代の思潮により種々なる方面から研究せられて其時代毎に新しい光を發見せられつゝあることは興味の深い事實である。

此書は保羅の傳記に就て彼が外部の生活を詳に記さんとするよりも彼が内部の生活に徹底しやうと努めたものである。自分は出來得るだけ神學の術語を避けて普通の語を以て保羅の信仰の實驗を説明しやうと試みたのである。これは著作の目的が專門家に研究の材料を提供しやうと云ふのではなくして一般の基督信者や求道者の讀物とするにあるからである。又自分は保羅が主張した教理よりも彼の靈的生命を中心として

記したのである。即ち彼が神學の組織的な形式よりも彼が信仰の實驗的な生命を高調したのである。

更に自分は保羅が信仰的實驗の活ける歷史である彼の書翰を基礎として此書を記した。自分は保羅に關する多少の著書を讀んで參考としたのであるが歐米の學者の意見を其儘に飜譯したのではない。自分は基督信者の一人として保羅の靈的生命に觸れたものを記した積りである。故に此書は冷靜な研究的の著作ではなくして自分が感激し憧憬し崇拜する使徒保羅の生氣潑溂たる信仰的實驗の證明である。

紀元千九百十三年の秋

著者

保羅傳

目次

第一章　保羅と羅馬帝國……一
第二章　保羅と世界的傳道……十五
第三章　保羅と新生活……三十
第四章　保羅と使命の自覺……三十九
第五章　保羅と基督……五十五
第六章　保羅と主なる基督……六十七
第七章　保羅と罪なき基督……七十五
第八章　保羅と第二のアダムなる基督……七十九
第九章　保羅と生前存在の基督……八十四
第十章　保羅と靈なる基督……九十
第十一章　保羅と信仰の意義……百三
第十二章　保羅と愛の教訓……百二十六

第十三章　保羅の倫理觀（一）……百四十一
第十四章　保羅の倫理觀（二）……百五十三
第十五章　保羅と國家的觀念……百六十五
第十六章　保羅と永遠の希望……百七十二
第十七章　保羅の人格……百八十二

附錄

（一）保羅傳の引證……一
（二）保羅が巡回せし地方……二十九
（三）保羅に關係ありし人物……三十九
（四）著者の參考書……五十八

保羅傳

第一章　保羅と羅馬帝國

基督は基督教の創建者であつたが保羅は基督教の傳播者であつた。基督の傳道は猶太の國内に制限せられたが保羅の傳道は羅馬帝國の重なる部分に及んだ。基督教と密接なる關係のあつた羅馬帝國は保羅の傳道的戰場であつた。彼の世界的傳道の事業と宗教的の實驗と卓越非凡なる人格とを知らんとするに當り豫め彼の活動の舞臺たりし羅馬帝國の狀態の大要を識ることは最も必要である。

第一　保羅の時代と羅馬帝國の政治

使徒保羅の時代に於て羅馬帝國の政治的勢力の範圍は頗る廣大であつた。初代基督教の思想家たりしテルトリアンは羅馬の領地を分裂せしむる者は基督教の主義に反對する主唱者にして世界歴史の最後の破壞者なりと考へて居た。羅馬の運命は永遠不朽にして天壤無窮なりとの古代の羅馬人の觀念は基督教の思想家にも深き印象を與へたのである。羅馬の存在と基督教とは保羅の時代に於て密接の

關係があつた。羅馬帝國が政治的に諸國民を統一せんと試みたる雄大なる思想は基督敎が宗敎的に諸國民を統一せんと試みたる雄大なる思想と相似たる點があつた。又羅馬帝國の政治的勢力が天壤無窮なりとの信念と基督敎會の宗敎的勢力が永遠不朽なりとの信念とは共鳴したる觀があつた。

羅馬帝國の政治的勢力が廣く世界的なりしことは基督敎の發展に價値ある準備をなした。當時に於ける羅馬の勢力範圍は大西洋よりユウフラテス河畔に及び東西約三千哩に延長し北はダニューブ及び蘇格蘭より南はナイル河に接近し種々なる民族と國家とは唯一の政府の下に管轄せられて居た。東方にある波斯と印度と北方にあるライン河外のH耳曼民族とは未だ羅馬の支配に屬せざりしも其他の諸民族は殆んど帝國の權威に服從して居た。地中海は帝國の統一を保つに有力なる便宜を與へ羅馬は歐羅巴、亞細亞、亞弗利加の三大陸を包括したる古來無比の大帝國であつた。而して帝國內の人口は一億內外に達して居た。

斯の如く雄大なる羅馬帝國は異りたる民族と國家とを支配し民族割據の精神と國民の排外思想とを打破するに大なる功績があつた。斯して帝國の政治は諸種の民族を繁榮と平和とに指導するに便利なる交通機關を發達せしめ完備したる法律と制度とを實施した。且つ帝國の偉大なる勢力と普遍的なる政治とは漸次に地方的の偏見と民族的の猜忌とを破壞し雄大なる世界的思想を養成し普遍なる人類的生活を助長した。斯る氣運と狀態とは保羅の事業に多大の貢献をなした。即ち世界を征服し諸の國民を統御することを目的となしたる羅馬人の政治的大望は全世界を神の國となし全人類を神の民となさんとしたる基督敎の根本思想と意義深長なる關係があつた。換言すれば羅馬の物質的、武力的、政治的、侵畧的なる帝國主義は基督敎の精神的、倫理的、宗敎的、人格的なる人道主義と其世界的にして人類的なる點に於て類似して居た。

第二　保羅の時代と羅馬帝國の倫理及哲學

保羅の時代に於ける羅馬の領內には羅馬固有の思想と道德と共に希臘の哲學及倫理思想が行はれて居た。民族の特徵として實際的なりし羅甸人は哲學に於て獨創的の天才を有するよりも希臘人の摸倣者であつた。羅甸民族は曾て希臘の哲學及倫理思想を輸入することに反對し排斥の態度を取り法律を以て嚴禁したことがあつた。然れど文明の大潮流は滔々として羅馬に漲つた。エピクロス、ストア及他の諸學派は羅馬人の間に勢力を有するに至つた。シセロとセヲカとはストア學派の謳歌者であつた。當時の哲學者には懷疑に沈淪した者があつた、享樂主義に耽溺した者があつた。嚴格なる克己主義を尊重する者があつた。本能の滿足と肉慾の欲求とを恣にする者があつた。自殺を以て最上の幸福なりと信じた者があつた。帝國人民の暗黑面には實に戰慄すべき罪惡が橫行して居た。然れど光明の側面を觀察すればストア學派の倫理思想には人類同胞の敎訓と四海一家の主義が認識せられて居た又彼等の宗敎は多神敎にして種々なる迷信と弊害を含蓄したるも智識的階級に屬する人にしてプラトウの

哲學に感化せられ理智の對境なる實有を觀念となし是を以て唯一の眞神なりと認めたるものがあつた。アリストートルの德義を最も尊重したる思想とソクラテスの靈魂不滅の敎訓とは彼等の間に受容せられて居た。

保羅の時代に於ける羅馬帝國には驕奢、淫逸、殘忍、壓虐、不義の勢力が强大であつたが、希臘人と羅甸人との中には基督敎の思想及道德に極めて接近しつゝあるものが少くなかつた。彼等は現在の哲學及倫理思想よりも更に新なる靈的光明と倫理的生命とを期待しつゝあつた。斯く帝國に行はれたる哲學及倫理思想には基督敎と調和すること能はざる要素ありしと偕に甚だ密接なる關係ある要素が含蓄されて居た。且つ猶太人が帝國の樞要なる地に住居し異邦人の間に猶太敎の信仰及道德を嚴格に實踐したることは羅馬帝國と保羅との關係を考ふるに看過す可らざることである。

第三　保羅の時代と羅馬帝國の法律

羅甸人は現實的特徵を有する法治的民族であつた。彼等の誇なる羅馬法の精細なる組織は社會狀態の變遷と道德思想の向上と偕に發達した。しかし未だ萬國公法の思想に達して居なかつた。是れ古代の羅甸人は世界の諸民族の平等を認めざりし故である。勿論戰爭の時に交戰國に對する一種の習慣があつた。しかし是は萬國公法として制裁力ある法律ではなかつたのである。又諸國民の往來交通に就て規則があつた。然し是は羅馬の官吏と市民とに特權を與へて他の民族と區別してあつた。紀元前三世紀の頃ペレグリナスは羅馬法の改善をなしたるも未だ幼稚なる思想を脫することが出來なかつた。然るに羅馬の共和時代に至りストア學派の哲學及倫理思想が羅馬に勢力を有すること丶なり法律家にしてストア學派の倫理を承認する者があつた。是に由て人間の性質と理性とは普遍的のものなることを認むることは法律思想に顯著なる影響を及ぼし萬國公法の觀念發達して羅馬法の精神に變化を來たしたのである。シセロは彼の法律論の中に群神及人類を總括したる廣大なる世界を支配する自然の法則あることを認識し諸の國民を支配する法律は普遍的性質のものにして或る國民又は都市が獨占的特權を有すべきものにあらざることを主張した。斯く自然の法則は總ての物を平等に支配するものなりとの思想はたゞ思想家の抽象的觀念として存したるのみならず實際家の具體的法律として現はれたのであつた。ハドリヤンの時代にはジユリアナスに由て羅馬法に一大進步があつた。紀元前百年頃には種々なる新法律が追加せられて羅馬法は漸次に普遍的性質を帶びるに至つた、斯く羅馬法は其の始めに於て羅馬人の爲に制定せられ其の特權は羅馬市民に限られてあつたが保羅の時代には羅馬法の精神は世界的となつて居た。羅馬市民に多少の特權ありしも法律の根本思想は諸國を平等に觀察するに至り羅馬法の精神は人類的に發展して居たのである。斯る思想は保羅の世界的傳道の思想と對照して考ふる時に興味ある問題である。

第四　保羅の時代と羅馬帝國の國語及文藝

帝國の管轄區域に於て羅甸語は官用語として希臘語は普通語として行はれて居た。羅馬の國語は羅甸語なりしも帝國内に廣く用ひられたる國語は希臘語であつた。ジュリヤスシーザーが羅馬を支配したる時に羅馬を發展せしむる彼の國是は羅馬と希臘との文明を融化して更に進歩したる文明を實現せしむる事であつた。此の國是は必ずしも英雄シーザーの創見のみではなかつた。彼の時代より數世紀前に於て羅馬人と希臘人と接觸する機會は少くなかつた。紀元前七八世紀の頃より希臘人は航海に長じ地中海の沿岸にある都市及諸島に交通し殖民して羅馬人と接觸した。特にアレキサンデル大王の遠征は希臘の文明を廣く普及せしめた。埃及に於けるアレキサンドリヤ市の建設の如きは亞弗利加の北海岸に希臘の國語及文藝を扶植するに偉大なる勢力となつた。アレキサンドリヤ市は通商貿易の中心なりしのみならず東洋思想と猶太思想と希臘思想との集注する處であつた。希臘語は保羅の時代より遙か前に於て世界の各地に用ひられて居た。又羅馬の學者にしてアゼンスに留學する者が多かつた。シセロの如きは再三希臘に留學した。保守排外の精神の强烈なる猶太人すら希臘語を自國語の如く使用し他國に住居する猶太人のみならず本國にあるものも希臘語を巧に語つた。更に紀元前二百五十年頃にアレキサンドリヤ市に於て舊約聖書が希臘語に飜譯せられたることを見るも如何に希臘語の勢力の顯著なりしかゝ推知せらるゝのである。歴史家ドウリンガーは希臘の國語及風俗はユーフラテス河畔より大西洋の沿岸に至るまで流行し希臘文化の影響は羅馬帝國内に强固なる基礎を有し啻に羅馬の領地のみならず波斯の演劇中に希臘神話の脚本あり希臘の修辭學と公開演說法とは遠く亞細亞の諸都市に及びたりと言つて居る。

斯の如く西方の羅馬領内と官憲との用語は羅甸語なりしも日常の實用語と文藝及社交等にはより多く希臘語が用ひられて居た。當時の希臘語は現代の英語の如く世界語にして希臘文化の感化は現代の西洋文明が全世界に對するが如き位置を占めて居た。此希臘の國語と文藝とは保羅の時代に於て羅馬の國語と文藝よりも基督教の發展に極めて親密なる關係があつた。特に保羅が希臘語を以て彼の信仰的實驗を記し希臘語を以て基督の福音を世界到る處に於て證明したることは記憶すべき重要事件である。

第五　保羅の時代と羅馬帝國の交通機關

羅馬史の大家フリエドランダーは古代より十九世紀の始に至るまで羅馬の帝政時代の如く交通の安全にして便利なる時代はなかるべしと言つて居る。羅馬が世界を統一して平和の時代となしたる前に於ける諸の國民の間斷なき大事業は戰爭であつた。交通の不便と旅行の危險とは諸の民族が戰爭に熱中し群雄割據して勝敗を決する上に於て頗る必要であつた。然るに羅馬帝國が世界を征服したるとはプリニーのが誇りたるが如く世界到る處に平和と繁榮との楯となつたので。フキローの如きは羅馬を以て世界的平和の盟主とさへ賞讃した。エピクテタスは言つた。シーザーは廣大なる平和を我等に與へたり今は小戰なく大戰なく、强盜、殺害、海賊等の勢をして無力ならしめたり我等は何時にても安全に

東西の海陸を旅行し得るなりと。斯く羅馬の政府は廣大なる領土を支配する便宜のため四通八達の道路を築造した。羅馬の帝都を中心となしたる五大道路は堅固無比にして七千哩の遠きに延長して居た。羅馬の國道には旅行者の便利のために里程標が建てられてあつた。又旅行者の便利を計る爲め著名なる、道路、宿泊の場處、及名勝古跡等を記入したる地圖があつた。其他通信機關、馬車、飛脚、宿驛の設備は頗る整頓したものであつた。

斯く交通の便利なりしがため商業の發達のみならず官吏の派遣、軍隊の出入、旅客の觀光等にて東西南北の往來は甚だ頻繁であつた。是が爲に希臘の學者にして西班牙の學校に教鞭を執る者もあつた。瑞西の羅馬殖民地にある貴婦人にして小亞細亞より黄金の細工をなす技術家を雇ひたるものもあつた。ゴールの各地に希臘の畫家と彫刻家とが住居した。エルサレムに於ては日耳曼人とゴール人とを發見し猶太人の如きは世界到る處に生活せりと言ふも不可なき狀態であつた。啻に陸上の交通のみならず海事思想發達してブリテン、アイルランド、エテオピヤ、印度に至る迄海陸の交通便利にして各地の貿易は甚だ盛んであつた。斯くして羅馬の都は榮華と驕奢と歡樂の巷となり世界の諸國より食料品、織物、美術品、製造物等が輸入せられた。默示錄の十八章に記さるゝ金銀寶玉珍器佳品の如き皆な世界の各地より羅馬の都に集中したものであつた。此の外に羅馬、アレキサンドリヤ、アゼンスの學校に留學する多數の青年學生と各地を巡回して音樂、美術、文學、工藝の教師となるもの又俳優及體育家は帝國の有名なる都市を往來巡業した。加之異教徒の宗教的儀式を重んじ著名なる神社と寺院に巡禮する者があつた。斯く交通の頻繁なりしことは異りたる風俗を觀察し異りたる民族が互に接觸して彼等の趣味と生活とを同化せしむる助となつた。羅馬帝國の領内に於ける交通の便利は保羅が世界的の傳道に計り知ること能はざる好機會を與へた。使徒行傳を讀む者は帝國の交通機關の便利が基督教の傳道に如何に祝福を與へたるかを知るであらう。

第六　保羅の時代と羅馬帝國内にある猶太人

羅馬帝國は世界の諸國民を征服したるが羅馬政府の領土統治の方針は諸の國民を悉く羅馬化することにあらずして其の大體の主義が羅馬政府の主義に反對せざる限り各國民の特徴を發揮することを許したのである。猶太人は羅馬の支配を受けたるも一種獨特の生活と信仰とを有する民族として存在することを得たのであつた。

古代の民族の中に世界的文明と深き關係ある者が種々あつた。其一は希臘民族である。彼等は埃及又バビロンより文明の源泉を掬したるも他の民族より優越して智識的に獨特の發展をなした。彼等は世界歴史に於ける學術の君主にして美術と文學との天使であつた。彼等が智識に對する憧憬は世界に對する彼等の誇であつた。フキニシヤ人と埃及人とが金錢を欲求するが如く希臘人は智識を欲求した。プラトウが評したる如く希臘民族は哲學、文學、美術を以て他の諸の民族よりも卓越して世界の文明に

一大貢献をなした。其二は羅甸民族である。彼等は剛健勇猛にして現實生活を慕ひ權利に對する觀念強烈にして法律の組織的才能を有し軍事的智識と實力に秀で政治的活動の主權者となり世界的帝國の建設者となつた。ウアジルは羅馬人の理想を歌ひ羅馬人の使命は諸の國民を征服し統御して世界に平和を齎らすにありと云つた。彼等は武力と法律とを以て世界の文明に貢献したのである。其三は猶太民族である。彼等は宗教的天才と道德的卓越とを以て顯著なる民族である。彼等は敬神愛國の情深厚熱烈にして嚴格なる律法的生活と神聖なる宗教的信仰とを以て世界の文明に貢献した。彼等の間より世界の光明にして人類の生命なる神秘的宗教は起つたのである。保羅の時代に於ける猶太人は世界の各地に散在して居つた。彼等がペルシヤ、メソポタミヤ、カパドシア、ポント、アジヤ、フルギヤ、パンフリヤ、エジプト、アラビヤ、クレテ、羅馬其他の重なる地方に生活したることは使徒行傳の記事に由て明かである。特にアレキサンドリア市の如きは大都會を五區となし二區は猶太人の居留地であつた。ジョセフオスは世界の何處にても人の住居する處に猶太人あらざるはなしと言つた。彼等は東方バビロンより南方は亞弗利加の北部まで西はゴール及西班牙より北はライン河邊まで自國の宗教と風俗とを固守し何處にありても選民の特徴を發揮して居た。彼等は本國以外に於けるエジプト、クレテ、シリヤ、小亞細亞、アンテオケ、アレキサンドリヤ、エペソ、タルソ、クプロ、マケドニヤ、アテンス、コリント、テサロニケ、ピリピ、黑海の沿岸より歐羅巴の南西北に於て彼等の信ずる神を禮拜し律法を守り傳說を貴み聖書を敎へ一種獨特の生活を送つて居た。モンゼンは當時の猶太人を評して彼等は世界の到る處に新なる故鄕を得たり。彼等は其風俗習慣に於て異りたるも到る處の諸國に於て圓滑に生活せり。古代に於て猶太敎は世界主義と國民的融和の有効なるパン種にありき彼等は羅馬皇帝の國家的支配の下に住居したるも世界の市民として生活せるものにて一個の國民に非ず單に人類として待遇せられたりと言つて居る。タシタスは猶太人に就て次の如く言つた。羅馬人は自ら神聖なる國民なりと稱へ猶太人を汚濁なる者の如く考ふるも羅馬人は猶太人が他の國民よりも正義にして純潔なることを認めざるを得ざりしなりと。斯の如く世界の各地に散在したる猶太人は到る處に猶太敎の會堂を建て律法、預言、詩篇等を敎へ異敎徒の間に神の存在、律法の精神、預言の意義、詩篇の解釋に就て少からざる智識を傳播した。彼等は使徒時代の歷史に於て保羅の傳道を妨害したるに拘はらず保羅は到る處にて猶太人ありしが爲に多くの便宜を得たのである。彼等は有形的に保羅の傳道の助となりしのみならず彼等の信仰と思想と生活とは異邦人を基督敎の信仰に指導する顯著なる勢力となつたのである。

第七　保羅の時代と羅馬帝國の宗敎

保羅の時代に於ける羅馬帝國の宗敎は多神敎、祖先崇拜、皇帝禮拜、女神禮拜、神話と傳說とに基ける種々なる宗敎であつた。此等の宗敎の禮拜の儀式は盛に行はれた。異敎の祭禮及巡拜は外形より見れば

甚だ壯嚴華麗であつた。しかし異教徒の信仰生活の內容は貧弱にして道德的生命に欠乏し人格を向上せしめ日常生活を聖化する活力がなかつた。且つ當時の宗教には統一的の勢力を有し普遍的なる信仰の要素を有するものなく其多くは地方的又は民族的の信仰であつた。故に異教の禮拜の對象となれる神々は或る民族又は或る地方を守護するものであつて全世界と全人類とを守護し祝福する神ではなかつた。

羅馬政府の宗教に對する政策は領土內に於ける諸の宗教に對し寬容なる主義を採用した諸の民族の地方的宗教禮拜を自由ならしめた。しかし羅馬市民は外來の新宗教を信ずることは古來の法律に背き且つ羅馬人の保守的感情を害するものと考へた。シセロの如く比較的に寬容なる思想家も國家に忠義なる羅馬人は嚴格に羅馬の國家的宗教を信ずべきことを論じた。しかし羅馬の政府は諸國を征服し其の民族が自國の宗教に熱心にして羅馬の政治的支配を受けつゝも宗教的には獨自一己を維持することの頑固なるを見て一方に羅馬の國家的宗教を保護すると共に他方に於ては外國の宗教を嚴禁せず寬容主義を取つて居た。

斯く帝國內には種々なる宗教ありて諸の民族の信仰を支配し雜多の禮拜が行はれて居たが羅馬帝國の政治的統一と交通機關の整頓せしため東西南北にある諸民族は往來交通の便利に由て異りたる地方と異りたる風俗と異りたる宗教に接觸したのである。而して世界の諸宗教が互に接觸し彼我の類似と差異とを識別するに至つた。換言すれば自國の神を眞の神なりと信じ自己の信仰を以て最も尊貴なる者なりと考へたる者が他國に旅行し他の民族の信仰生活に觸れたる時に他國に於ても他の民族に由て信仰せらるゝ神あり禮拜あり聖經あることを發見した。斯くして實際生活より比較宗教の思想を喚起したのである。是が爲に或者は自國と他國との迷信を目擊して宗教を輕侮し懷疑家となるものもあつた。或者は自國の宗教の外に進步したる宗教の存在することを自覺するものもあつた。更に識者の中には種々なる宗教を研究し其の長處を採用し諸說を混じて一の宗教を組織せんと試みるものもあつた。而して異邦に行はるゝ諸の宗教を統一し折衷せんとする思潮があつた。是は時代の大勢の然らしむる處である。政治、法律、文藝、實業等が世界的となり普遍的となりたる如く宗教も亦諸の國民が普遍的に信奉せられ得る統一的の要素がなければならなかつた。しかし舊來の宗教を融和折衷して新なる宗教を創立することは不可能であつた。如何とすれば舊き信仰は既に頽廢して勢力を失ひ其多數は滅亡に瀕しつゝあつたからである。斯くして帝國內にある異教は新なる時代の要求に應ずることが出來なかつた。新なる時代には新なる狀態に適する新なる宗教が必要であつた。即ち總ての民族の信仰に適し總ての人類の要求に滿足を與ふる生命を有する世界的にして人類的なる新宗教が必要であつた。

羅馬皇帝の中に於てすら基督教が帝國の宗教として公認せられたる後に於て異教の長處を折衷混和し

て諸の國民を統一する異教的信仰を奬勵せんと試みたるものがあつた。しかし多神教、祖先崇拜、偶像教を統一したりとて此の目的を達することは出來なかつた。保羅が基督教を羅馬帝國内に紹介したる頃に當て基督教の思想に觸れざる識者の間には個人の運命が人類全體に對して密接なる關係あり一の國家が全世界に對し大なる影響を及ぼすものなることを自覺したる者があつた。而して宗教的信仰も世界的思想を以て人類的救濟を目的とするものならざる可らざることを認識するに至つた。異邦傳道の使徒を以て任じたる保羅の生涯と羅馬帝國内の宗教の狀態とは何物か或る意義深き關係あることを暗示して居るのである。

是まで略述したる如く使徒保羅と羅馬帝國の狀態とは極めて親密なる關係があつた。猶太教が基督教の起原に就て準備をなしたる如く希臘羅馬の文明も亦基督教の發展に多大の貢献をなしたのである。保羅の傳道は羅馬帝國と接觸することなくして其目的を完了すること能はざる如く羅馬帝國の歴史的發展の意義は保羅の傳道なくしては解釋すること能はざるものがあつた。保羅が世界的傳道の活動をなす爲に羅馬帝國の全盛時代に生れたることは無限の意義ありと言はざるを得ないのである。

第二章　保羅と世界的傳道

神秘にして幽玄なる意義を含蓄する基督の復活より約五十日を經てペンテコステの日に於てエルサレムにある基督者の中に驚異に堪へざる靈的覺醒があつた。使徒行傳の記者は往昔シナイ山に於ける神の顯現の詩的記事に髣髴たる靈活なる筆を以て次の如く誌した。

『ペンテコステの日に至て
　弟子たち皆心を合せて
　一つ處に在しに
　俄に天より
　迅風の如き響ありて
　彼等が座する所の家に充り
　焰の如きもの現れ
　岐て彼等各人の上に止る
　是に於て彼等はみな
　聖靈に滿され

其聖靈の言しむるに從ひて
異たる諸國の
方言を言ひはじめたり』

と。彼等は基督が十字架上に殺され給ふや哀愁と絶望の雲に蔽はれて居た。しかし基督の復活の事實に遭遇するや。彼等の或者は是を目擊し或者は是を傳聞して基督に對する信仰を恢復した。特にペンテコステの日に於ける聖靈の感化に由て彼等の內的生活に一種の潑溂たる生命が充實した。彼等は神に對し人に對し一種の淸新なる責任を自覺した。而して彼等の或者は斷言した。

『既に神はイエスを甦らせ給へり
我等は皆その證人なり』
『是故に彼は既に神の右に擧られ
約束の聖靈を父より受て
今爾曹が見る處聞く處の者を注けり』
『然は凡てイスラエルの全家よ
爾曹が十字架に釘し此イエスを立て
神は是を主となし
キリストとなし給ひしことを
確に知れ』

と。彼等は基督の復活を確信し、聖靈の感化に沐浴し、彼等の宗敎的實驗を證明したるのみならず。彼等は基督の愛に感激し、基督の再來に對する希望に燃え、信者相互の間に於て骨肉の如き精神を以て交際し、同胞主義を日常生活に實現した。

『信者は皆一處に會て諸物を共にし
產業と其所有を賣り
各人の用に從ひ之を分與へぬ』
『日々心を合せて殿に居り
又家に於てパンをさき
歡喜と誠心をもて食を偕にし
神を讃美し總の民に悅はる』

是れ原始的信者の現實生活であつた。彼等は基督敎的の愛を以て生活したるのみならず基督の復活を記念し靈的の希望と歡喜とは胸に躍り生命の充實したること古今無比の狀態であつた。然し原始の基督者の多數は猶太敎より轉化したる者であつた。故に新なる生活に入りたる後に於ても猶太敎に對し

纒綿の情なくして止むこと能はざるものがあつた。彼等の中には新信仰に飛躍したる後も舊信仰の儀式と風習に服從したる者があつた。基督敎の代表的人物の中にすら民族的偏見を脱却すること能はざる者があつた。故に原始的基督の團體は最初に於て世界的なる神の國を建設し人類的なる救の道を宣傳して民族と國家より超越したる普遍的信仰を實現することは頗る困難であつた。是が爲に猶太人及異邦人の區別なく基督者となるに當り種々の儀式ある猶太敎の門を過る必要ありと考へたる者があつた。斯る思想の中に包まれたる基督敎が其本質を發揮して世界的、人類的なる發展をなすには是を實現する時期の成熟と偉大なる人格を要求しつゝあつたのである。斯る時期の成熟に與て力ありし重なる事實を略記すれば次の如きものがある。即ち其一はペンテコステの日に於ける異常なる靈的覺醒である。其二は希臘的の感化を受け比較的に寛大なる思想を抱く者が慈善委員に選ばれたことである。其三は猶太の權威よりの迫害に由てエルサレムにある基督者が四方に離散したことである。其四はピリポがサマリヤ地方に傳道したことである。其五は使徒ペテロがヨッパに於て意義深長なる幻影を見たことである。其六は基督者の勢力の中心點がエルサレムよりアンテオケに移動したことである。其七はコルネリオの家族が洗禮を領したことである。其八はエルサレムの會議に於て猶太的傾向を有する思想よりも世界的色彩を帶びたる思想が優勢なりしことである。其九は基督敎傳道が異邦人の間に着々成功して基督者の眼界が擴大せられたことである。其十は熱烈なる猶太敎徒なりしソーロが基督の顯現に接觸して基督者となつたことである。其十一は紀元七十年頃エルサレムが羅馬より破壞せられたことである。此等の事件は猶太的の傾向ありし基督敎が世界的發展をなして其本質を發揮するに少なからざる助となつたのである。就中ソーロが新生活に入り基督者としての信仰的實驗を積み使徒保羅として異邦傳道に献身したることは其最大原因であつた。保羅と基督敎の世界的傳道とは密接なる關係があつた。

使徒保羅の生涯と世界的傳道の略歴とは如何なりしか。保羅は純粹なる猶太人の血統を遺傳しベニヤミンの支派に屬しキリキヤのタルソに於て誕生した。タルソは小亞細亞の一角にある都會にして東西交通の要路に當て居た。彼はピリピ書に於て、

『我は第八日に割禮を受たる者にして
イスラエルの族ベニヤミンの支派
ヘブル人より生れたるヘブル人なり』

と記した。又使徒行傳に彼は、

『我はキリキヤのタルソに生れしユダヤ人にて
鄙邑の民に非ず』

と告白して居る。彼は宗敎的の熱心と愛國的の精神旺盛なりしパリサイ人として敎育せられた。彼は

希臘的の生活と教化とにも接觸して居た。しかし彼は希臘の哲學及文藝を專攻した者ではなかつたので有らう。彼は猶太の律法を當時の碩學ガマリエルに學び猶太教の信仰に對しては狂熱的であつた。彼は自ら、

『律法に由ればパリサイの人
熱心に由れば教會を迫るもの
律法に在ところの義に由ば
玷なきものなり』

『我が先に猶太教に在しとき
行ひたる事を爾曹聞けり
即ち甚しく神の教會をせめ
かつ之を殘賊せり
我又心を人よりも先祖等の遺傳に熱し
ユダヤ教にありては我國人のうち
年ひとしき多の人に超たり』

『我はユダヤ人にして
キリキヤのタルソに生れ
而して此邑のガマリエルの足下にて長てられ
先祖の嚴なる律法に由て教へられ
神に熱心なりしことは
今日の爾曹總の者の如くなりき』

と告白した。保羅が猶太教徒として熱心勇健なりしことは彼が基督者を民族的信仰の中心なるエルサレムの神殿を瀆す者となし又神聖にして尊貴なるモーセの律法を破壞する者として極力迫害せしことに由りて明かである。使徒行傳の記者は彼に就て次の如く記して居る。

『サウロは教會を殘害して
此處彼處の家に入り
男女を曳出して之を獄に付せり』

と。又同じ記者は保羅の語として次の如く記して居る。

『又爾の證人ステパノの
其血を流さるゝ時われ傍に立て
其殺さるゝを好とし

彼を殺す者の衣を守れり』

『我先に斯道の人を男女とも縛り
　且獄に投じ死に至るまで之を窘めたり』

と。斯く保羅は基督教を信仰と民族の敵として迫害しエルサレムのみならず四方に離散したる者をも撲滅せんと熱中した。彼は是が爲に祭司長の敎書を奉じてダマスコに赴きつゝある途上神秘なる基督の顯現に接し驚異に堪へざる基督の聲を聞き新なる生活に飛躍したのである。使徒行傳には是に就き、

『サウロは猶も兇言と殺氣を吐て
主の弟子等をせめ祭司の長に往て
ダマスコの諸會堂に寄る書を求む
彼は此道に從へる者を見ば
男女にかゝはらず
捕てエルサレムに曳んと意へり
彼往てダマスコに近ける時
忽ち天より光ありて彼を環照せり
かれ地に仆る其時サウロサウロ
何故我を窘迫るやといふ聲を聞り
サウロ曰けるは主よ爾は誰ぞ
主いひ給けるは
我は爾が窘迫ところのイエスなり
爾荆ある鞭を蹴は難し
彼戰き駭きて曰けるは
主よ我に何を行しめんと爲給ふや
主彼に曰けるは起て邑に入れ
さらば爾行べき事を示さるべし
彼と偕に往る人々言ふこと能ずして立止り
其聲を聞ども誰も見ざりき
サウロ地より起て眼を啓きたるに
何も見ざりければ伴へる人等
その手を援てダマスコに入る』

と記してある。保羅は斯る幽妙にして莊嚴なる靈的現象に觸れ新なる生活に入つた。彼は復活したる基督と直接に觸れたることに由て信仰の新天新地に直進したのであつた。

保羅は新なる生活の人となりて如何になしたのであつたか。彼は生涯の轉機に遭ふや直にダマスコに往き更に轉じてアラビヤに退隱したのである。彼は自らガラテヤ書に於て

『又我より先に使徒となりて
　エルサレムに在ところの者にも往かず
　アラビヤに往き又ダマスコに返れり』

と記して居る。想ふに彼は驚べき生活の激變をなし暫く靜寂なるアラビヤの地に退隱し彼の舊思想と新實驗との融化に就て瞑想したので有らう。彼は非凡なる信仰的實驗に合理的解釋を與へんと試みたので有らう。しかし保羅のアラビヤ生活に就ては史的資料が欠乏して居るのである。

保羅がアラビヤよりダマスコに歸つたことは事實である。彼は玆にて猶太人の反對に遭遇して殺害せられんとした。保羅は猶太教徒の見地よりすれば叛逆人であり變節者であつた。彼が猶太人より排斥せられたることは自然の結果である。彼は猶太人の迫害と危難とを逃れてエルサレムに往き約十五日間滯留し教會の代表的人物なるペテロとヤコブに面接した。エルサレムに於ても彼に對する猶太人の敵愾心は猛烈にして彼を殺さずんば止まざる勢であつた。故に保羅は久しく遠かりてありし懷かしき故鄉なるキリキヤのタルソに歸つた。彼が鄉里に歸つて居た時に初代教會の模範的基督者なるバルナバは保羅の信仰と才能と人格とを認識して將來の傳道的活動に最も重要なる位置にあるアンテオケに招いた。バルナバが先輩として後進なる保羅の人物を信任して適才を適處に推薦したことは初代基督教の發展史に於て記憶すべき美談であつた。彼等は協心同力アンテオケに於て傳道せしこと一年有餘にして相携て第一回の傳道的旅行に出發した。

彼等は當時の傳道の根據地とも云ふべきアンテオケよりセルキヤに下りクプロに往き島司を基督者とならしめて亞細亞に向て出帆した。保羅は到る處に於て同胞猶太人の會堂を訪問し福音の證明をなした。しかし彼は猶太人より種々なる迫害を受けた。此傳道旅行はペルゲ、ピシデヤのアンテオケ、イコニオム、ルステラ、デルベに及んだ。斯くして一行はシリヤのアンテオケに歸着したのである。第一回の傳道旅行は一方に於て猶太人の反對と妨害ありて豫想外の艱難があつた。しかし他方に於ては外國傳道の希望甚だ洋々たるものがあつた。此旅行の範圍は小亞細亞の一部に止りしも其運動は福音の光輝が暗黑なる異邦の民衆を遍照する曙光であつた。此傳道は基督教が獨力奮鬪、權勢に由らず、黃金に由らず、智識に由らず、策略に由らず、唯だ基督に於ける信仰と人格とに由て世界的に發展する希望と光明とに充實したる遠征軍の初陣であつた。

保羅は暫時アンテオケに滯在して後エルサレムに往き宗教會議に列席し猶太教の儀式に就て論じ異邦

人の救に就て希望に滿てる報告をなし世界的基督敎の勝利を證明してアンテオケに歸つた。

保羅は第二回の傳道旅行に於てマコを同伴することに就きバルナバと意見を異にしシラスと共に出發した。彼は第一回に旅行したる傳道地を歷訪しフルギヤに新なる敎會の基礎を置きルステラにてテモテに逢ひ彼を伴ひトロアスに往き玆にてルカも亦一行に加はつた。第二回の傳道に就て最も記憶すべきことはトロアスに於ける保羅の幻影である。此神秘なる幻影は彼が傳道の轉機であつた。當に彼が傳道の轉機なりしのみならず基督敎の世界的膨脹の轉機であつた。更に之を世界の文明史上より觀察すれば歐洲文明の轉機であつた。保羅は一夕トロアスの客樓に於て遙に海を隔て雲濤渺茫たる彼方に當り歐洲大陸の横はるあり雄大なる羅馬帝國が西方に根據地を有することを沈思默想したる時に彼が異邦傳道の雄心は勃々として禁ずることが出來なかつたのであらう。彼が人類救濟の熱情は焰々として燃え是を消すことが出來なかつたのであらう。保羅は斯る雄心と熱情と信仰とに燃えたる時に深夜人靜にして四顧寂然たる處、彼を想ひ此を懷ひ、或は祈り或は默し、千感萬情湧き去り湧き來り、靈的感興は潮の如く、彼の胸中に漲つたのであらう。斯くして彼は神秘なる幻影に接したのであらう。そは對岸のマケドニヤ人が忽然彼の眼前に現はれて、

『來りて我等を助けよ』

と絶叫したとである。保羅は此の暗示と敎訓の充實する幻影に接するや。天來の靈に指導せられて小亞細亞の北部を巡回する豫定の計畫を變更し歐洲大陸の一角に向て進發したのである。嗚呼彼は當時無名の一傳道者であつた。然かも彼が便乘したる一葉の孤舟には他日世界を風靡し人類を征服する新信仰と新文明の原子が載せられて居たのではないか。誰か此無名の一傳道者の活動の影響が希臘羅馬の文明に基督敎文明の洗禮を授くることなるを識る者があつたらうか。想ふに保羅の胸底には暗黑なる歐洲の腐敗したる人心を基督の福音に由て聖化せんとする靈火が燃て居たので有らう。滅亡と悲慘の裡に罪惡の奴隷となれる羅馬帝國の人民を救はんとすることは保羅が不斷の祈禱であつたのであらう。斯くして保羅の一行はトロアスよりマケドニヤに直航しピリピ、テサロニケ、ベリヤ地方に福音を宣傳して敎會の基礎を置ひた。彼は更に進轉して希臘文化の花園にして世界の文藝と美術の故郷なるアデンスに到り哲理と現實の權威の强烈なる智識の崇拜者に對し神秘にして超自然なる基督の福音を證明した。彼は又歡樂と實業の中心にして物質と肉慾の勢力强大なるコリントに往き靈的生活の歡喜と純潔なる生活の價値と高貴なる人格の威嚴に就て說敎した。一年有半にしてテサロニケの基督者に贈る書翰を認めエペソを經過してエルサレムに赴き當時の傳道の策源地なるアンテオケに歸着した。

保羅は更に第三回の傳道旅行を企圖したのである。彼はアンテオケより出發しガラテヤ、フルギヤを經由しエペソに赴き迷信と不道德の盛んなる處にて約三年の間傳道した。彼は此間に於て生活難に

遭遇し自給勞作して献身的傳道の活模範となり多艱多忙の裡にあつてコリント前書及ガラテヤ書を記し彼が信仰的實驗の神髄を證明した。彼はエペソよりコリントに往く途すがらマケドニヤ地方を訪問しコリント後書を記しコリントに達し三ケ月間滯在し彼處にて羅馬書を書き贈つた。彼はコリントよりエルサレムに向て出發し歸途マケドニヤを經由し暫時トロアスに留りミレタスに於てエペソの長老を招き至誠人を動かし言々血あり句々涙ある傳道的又は信仰的の奬勵を與へカイザリヤに赴きエルサレムに到着した。彼が此歸國は實に決死的の旅行であつた。彼は救主基督の爲には生命を顧みざる熱烈なる信仰を抱いて歸國した。果然彼は猶太人の迫害を受けて敵に捕縛せられた。猶太人は保羅を殺さんと計りたるが彼は千人の長の保護に由てカイザリヤのペリクスの許に護送せられた。彼はカイザリヤに於て幽暗なる獄窓に呻吟すること二年餘にしてフエスタスの時に當り彼はアグリッパ王の前に福音を宣傳しその熱烈なる信仰と威嚴ある雄辯とは王をして戰慄せしめた。彼は羅馬の市民權を有したるが故に羅馬政府に上告するため羅馬に赴いた。而して彼は羅馬に滯在すること約二年餘にして彼の小書翰なるピレモン、ピリピ、コロサイ等を記した。

保羅は羅馬に於て幽囚の身となりてより後は如何になつたのであるか。是に就て種々の說がある。其一は保羅が羅馬に於て幽囚せられたる時彼は遠からず放免せられ自由の人となり再び基督にある同胞と相語る機會あることを喜びたれば（ピリピ一の二十五二十六、二の二十四）彼は豫期したる如く自由の人となりたるならんと云ふ說である。其二は羅馬のクレメントは彼の書翰中に保羅は西方の端まで傳道に赴きたりと記してある。此語に由れば彼は羅馬書十五章二十八節に記せる如く西班牙地方の傳道を實現したのではあるまいか。ユシービヤス、クリソストム、ジエローム等は此說に傾いて居た。しかしドウリンガーは西班牙敎會の起原を調査し紀元三世紀前に遡ること能はずと言つて居る。其三は羅馬書、ピレモン書、コロサイ書、ピリピ書、テモテ前後書の記事に基き保羅は二回羅馬に幽囚せられたるならんとの推測をなし第二回の幽囚時代にテモテ書を記し熱き信仰を以て近き將來に彼が死の切迫せることを覺悟したるが如しと云ふ說である。此說に從へば保羅は紀元六十五年前後に解放せられ其後に起りたる迫害の時に殉敎者となつたのではあるまいか。

保羅は斯くして彼の生涯を基督敎の世界的傳道に献げ彼の敎區は全世界にして彼の敎會員は全人類であつた。彼が献身的傳道の結果は希臘羅馬の文明に基督的文明の洗禮を授け歐洲の歷史に新生命を與へ新光明を投じたのである。

第三章　保羅と新生活

世界の光明にして人類の救主なる基督は人生と宗教とに就て無限の意義を含蓄する十字架の上に於て新なる生命を人類に與ふるために犧牲となり給ひし時に彼に信頼したる少數の弟子は四方に離散したのであつた。

基督は神の國を建設するために山光水色の明媚なるガリラヤの各地を巡回し福音の眞理を宣傳し弟子の靈的教錬に心を潜め未だ殉教の血を流し給はざる時に當り彼はエルサレムに於て宗教家、學者、政治家より迫害せられ主義のために刑場の露と消ゆるとありとも最後の勝利を得るために復活し天に凱旋することを豫期し給ふた。彼は豫期の如くに猶太の權威ある階級と衝突して彼の往くべき道に進み給ふた。

基督は斯く悲慘にして壯烈なる運命に從順せる生活を送り給ひたるが、この人類の歴史に於ける最も悲壯なる基督の最後を目擊したる初代の基督者は救主の再來に對する信仰甚だ熱心にしてエルサレムに集合した。彼等は基督の犧牲的なる死を記念するためにパンを裂くことゝ祈禱を偕にすることゝを努め救主の再來を期待しつゝあつた。

保羅がコリント書に記せる如く基督の驚くべき復活の事實はペテロを始め使徒及初代の基督者の信仰的覺醒となつた。エルサレム及ガリラヤの各地にありし基督の弟子は新なる希望と勇氣とに充實して傳道の熱心に燃て居る。彼等は復活し給ひし活ける基督に對する信仰的實驗が甚だ鮮明であつた。此の實驗は基督者の信仰の基礎となり新なる崇拜即ち耶蘇基督を禮拜の對象となすに至つた。由來基督は禮拜の創造者にあらざりしが彼は新なる禮拜の時代を作興し給ふた。基督の在世中に於て彼の聖善なる人格は彼に對して熱心なる崇拜者と歎美者とを牽引した。基督は彼の崇拜者の中心的勢力となり給ふた。基督の宗教的自覺と靈的の生命は彼等を感化した。且つ基督の復活し給ひしことは弟子の宗教的信念の活ける力となつた。この活ける基督は弟子の內的生活に神秘なる感化を與へ彼等をして新なる生活に入らしめ給ふた。この復活は神話又は夢幻の如く想はれて史的事實なりと認め難きが如きも是に就て數百人の見證者が紀元五十年より六十年頃まで生存したることは保羅が殘したる記錄に由て明瞭である。

使徒行傳によれば復活したる活ける基督を崇拜し彼の人格に憧憬したる弟子は其初に於て人類同胞の主義を基礎となす生活をなし、洗禮と晩餐の禮典を守りユダヤ、サマリヤ、ガリラヤよりフキニシヤ、シリヤ、クプロ地方に傳道した。彼等は基督を普通の預言者、學者、聖者と認めなかつた。彼等は耶蘇基督を『主』として尊崇し禮拜した。彼等は『主』に對し祈禱を捧げたのである。初代の基督者は其純粹なる信仰、献身的の傳道、犧牲の生活、殉教の熱誠に由り曾て彼等の『主』を迫害したる猶太の權

威ある階級と衝突するに至つた。而して基督の殉教の精神と犠牲の實行とは初代の基督者の精神となり實行となつた。是が代表的人物はステパノである。最初の殉教者の碧血はステパノの虐殺せられたることに由て濺がれた。彼は誠實なる信仰の告白をなしたるため反對者より無罪の血を流された。しかし彼は垂死の瞬間に於て彼を殺す敵のために天の祝福を祈つた。彼の顔は天の榮光を反射して神々しく輝いた。この神聖にして高潔なるステパノの殉教は何人に對してかある深刻なる道德的の印象を與へずして止むことが出來なかつた。即ちタルソより來れる熱心にして勇敢なるパリサイ人、謹嚴にして剛健なるソウロはステパノの悲慘なれども壯烈なる殉教の活劇を目擊してナザレの耶蘇に信賴する者の忠魂義膽に感動せられずして居られなかつた。

ステパノが殉教者となりたる後エルサレムに於て基督者に對する迫害の運動が起つた。祭司長、學者、長老より慘酷なる迫害を受けたる基督者はエルサレムに住居すること能はず四方に離散した。彼等の或者は遠くダマスコに難を避けた。猶太の有司は彼等を撲滅せんとて特別にソウロを遣した。彼は其の途上に於て將にダマスコの町に入らんとしたる處にて神秘なる靈的實驗を得たのである。是は彼の生涯に於ける完き變化の時にして彼が新なる生活に入る曉天であつた。

保羅が生活の革命、信念の激變、目的の轉覆なりし新なる生活の實驗に就き異邦の歴史家は沈默して居るのである。しかし保羅が新なる生活の實驗は後世に於て世界歴史の轉機となつた。

保羅が新なる生活に入りたる事實に就て二種の記錄が殘つて居る。一は保羅が自ら證したる事實である。他は使徒行傳に記さるゝ三個の證明である。此等の二種の材料は完全に調和せしむること困難なるも大體に於て同じ事實を證明したものである。保羅が新なる生活を始めたる記錄の解釋は種々あれども彼が心理的に未だ曾て經驗したることなき靈的現象に觸れ、未だ曾て玩味したることなき宗教的自覺に達したることは疑ふ可らざる事實である。

使徒時代の古き記錄によればペテロが復活し給ひたる基督を目擊し他の使徒も復活したる基督に接したることを記してある。保羅に關する古代の記錄及保羅が自ら證したる書翰に由るも彼自ら復活し給ひたる基督を見たることを斷言して居るのである。彼は明確に、

『我にも現はれ給へり』

と言ひ。又

『我は我儕の主
イエスキリストを
見しにあらずや』

と告白して居る。彼は又コリント後書に

『光に命じ

暗より
照出でしめたる神
我儕をして
イエスキリストの顏にある
神の榮光を知るの
光を顯さしめんために
我儕の心を照し給へり』

と記せる語より推測すればこれ保羅がダマスコに往く途上に於て天來の光明に接したる當時の感想を鮮かに表現したるものではないか。これ彼がかの時に於て一種の幽妙にして神秘なる光明に照されたる確證ではあるまいか。使徒行傳に記さるゝ彼が新なる生活に入りたる三回の記事は創世記にある天地創造の時に當り光明は暗黑を照しこれを美麗にして鮮明なる新天新地と變化したるが如く保羅の心の暗黑は基督の光明に照されて新なる生活に入りしことを詩的に表現したるものであらう かつ此等の記事は聖き神の顯現し給ふ處は榮光燦然として輝き渡る古來の信念に由て色彩を添へたるものではあるまいか。

保羅が新なる生活に入りたる原因は神にして復活したる後も永遠に活きて存在し給ふ基督の光明に照

されたるがためである。保羅は此時より基督に捕へられ基督の所有となりたる確實なる自覺があつた。彼がピリピ書に、

『キリスト
之を得させんとて
我を執へ給へるなり』

と記したる語には深き意義が含んで居るのである。保羅は嘗てエルサレムにある基督者を捕へ鞭うち獄に入れ殺した。彼は殺氣を含んでダマスコまで迫害に赴きたる基督の敵であつたが。彼は今自ら基督の僕となり基督者の友となり基督の爲に迫害せらるゝことを喜びとなす異邦人の使徒と變化したゝこの變化は神秘なりしも確實なる事實であつた。而してこの事實は保羅に對する基督の直接なる顯現であつた。

保羅が新なる生活の實驗は是より後の生涯に於て彼と基督との靈的交通と神秘的實驗とに親密なる關係があつた。彼はガラテヤ書に於て基督と彼との特別なる關係を記して、

『キリスト
我に在て
活るなり』

と言い。又彼はピリピ書に記して

『我わが主
キリストイエスを識を以て
最もまされる事とするが故に
凡のものを損となす』

と斷言した。斯る實驗は保羅の信仰生活に於ける斷片的の事件又は孤獨的の現象ではなかつた。これ彼が全生涯に於ける神秘的なる信仰生活の基礎となつた。彼がこの實驗は歳月の經過と共に愈々妙境に達したのである。彼は信仰生活の樂園に於て歡天喜地の境界に逍遙し、彼の靈と基督の靈と融合して、基督は彼か、彼は基督か、彼活るにあらず基督彼に在て活き給ふ信仰生活の極致に達したことは彼がダマスコの途上に於て活ける基督の力に觸れたること、親密なる關係があつたのである。

前に述し如く彼は基督の反對者より基督の崇拜者となつた。嘗て基督を迫害した者が今は基督の爲に迫害を受る者となつた。頑固なるパリサイ派の代表者が熱烈なる基督の勇將となつた、有名なる猶太教徒が非凡なる基督教の使徒となつた。彼が斯も顯著なる新生活に入りしことは實に瞬間的の激變であつた。しかしこの激變は決して魔術的の變化ではなかつたのである。彼の生活の一大革命に就てはその遠因と近因ありて消極的にも積極的にも遠く且つ深き心理的の準備ありしことを記臆せねばならぬのである。彼が新なる生活に入りたる消極的の準備は彼が年壯にして氣鋭なるパリサイ人として饑ゑ渇くが如く正義を慕ふ熱誠があつた。彼はこの渇望を滿足せしめんがために古來の律法を嚴格に遵奉することに熱中した。彼は律法の實踐に由て彼が正義を滿足せしめんと試みた。彼の慘憺たる靈的煩悶の痛苦は多年の後に於てローマ書の中に記されある程である。彼は最も誠實にして熱心なる時にすら彼の良心は完全に律法を守ることの不可能なるを自白して居る。彼は猶太教の律法的にして儀式的なる修養と禮拜との中に自由にして靈活なる潑溂たる宗教的生命を發見する能はざることを實驗した。更に彼が新なる生活に入りたる積極的の準備は何であつたか。彼は純粹なる猶太人として古來祖國の歴史に異彩を放ちたる預言者の信仰的實驗に負ふ處が少くなかつたのであらう。彼は神の顯現が人の内的生活に於てせらるゝことを自覺したのであらう。また彼が基督者を迫害したる時に基督者の現實生活に觸るゝ機會頗る多く彼等の言行に就て眞實なる消息を識る便宜を有したのであつた。彼は自ら迫害しつゝある基督者の人格と直接に觸るゝことに由て彼等に與へたる基督の卓越非凡なる靈的感化を冷眼に看過することは出來なかつたのであらう。或人は保羅が基督に會見せしことありしならんとの假定說を唱ふるのであるが。彼が歴史上の基督即ち昇天し給はざる前の基督を個人的に識りしや否やは輕々しく斷定を下すべき問題ではないのである。しかし保羅が反對黨の有力家として基督者の言行に由て基督に就き或る智識を有したることを想像することは難くないのである。斯る見地よ

り觀察すればダマスコ途上に於ける天の光明はソーロの空虛なる宗教生活の上に輝き始めたるにあらずして年壯迫害者なる彼の心に天の靈火が瞬間に燃ゆるに足る靈的の準備があつたのではあるまいか。而して此時に燃えたる天の靈火は彼の心の宮に煌々として輝き後に至り基督は彼の內に在まし給ひ、彼は基督と偕に活る神祕なる宗教生活の妙趣を味ふに至つたのではあるまいか。ダマスコの途上に於ける彼の新なる生活の實驗は基督者の理想的生活なる、

『もはや我活るにあらず
　キリスト
　我に在て活るなり』

との自覺と深き關係あることを認めざるを得ないのである。斯く觀察すれば保羅の新なる生活と活ける基督とは離る可らざる宗教的關係があつた。基督は特に自らを保羅に現はし給ひ、保羅もまた特に自らを基督に献げ、保羅の宗教は基督に集注して居たのである。即ち基督を中心となす信仰生活は保羅が新なる生活に入たる後に於ける理想的の生活であつた。彼はこの理想を自己の生活に實現せんがために彼の生涯を一貫して克己し奮鬪し修養し忍耐し向上して信仰の善き戰をなし永遠の生命に充實して正義の榮冠を戴くに至つたのである。

第四章　保羅と使命の自覺

基督教の起りたる前後に於て注意すべき二大人格があつた。一は洗禮のヨハネにして他は使徒保羅である。ヨハネは『女の生める者の中にて最も大なるもの』として又預言者よりも卓越したるものとして基督の先驅者となつた。彼は猶太民族の宗教的覺醒を促し道德的の改革を叫び基督の使命に證明を與へた。而して『野に呼べる人の聲』はその影響する處『エルサレム及びユダヤを擧り又ヨルダンの四方』に及んだ。しかし彼の教訓と彼の弟子とは禁慾的にして非社交的であつたため團體として永く繼續することは出來なかつた。斯くして耶蘇基督は洗禮のヨハネに續て起り猶太教の最も崇高にして深遠に純粹にして健全なる要素を彼の教として採用し、猶太教の形式と虛僞とを棄て神と人との靈的調和を實現し神の子の救と自由とを彼の弟子に與へ給ふた。

されど基督の極めて短期なりし公の生涯に於ける活動の結果は當時に於てあまり偉大にして豐富ではなかつた。彼に信賴したる崇拜者の數は多からざりしのみならず彼の福音の宣傳せられたる範圍もまた甚だ廣くはなかつた。彼の在世中に敬虔なる猶太人にして彼の救主なることを信じ神の國の建設せらるゝ日の遠からざることを期待したる者もパレスタインの外には極めて僅かであつた。而して後に於て世界を風靡し人類を教化する實力を有する基督の教に對し世人は猶太教中の一小宗派にてあるか

の如くに想ふて居た。斯る位置にありし基督教を弘く世界歴史の中心に導き希臘と羅馬の文明に接觸せしむるため偉大なる貢献をなしたる者は實に保羅であつた。

しかし保羅は基督の宗教を改造したる新なる宗教の建設者ではなかつた。彼は世人より斯る誤解を招くことを懼れこの點に就て警戒することを忘れなかつたのである。彼が基督を彼の救主として信頼し超人的の存在者として崇拜したることは彼が宗教的實驗に基く事實であつた。保羅は自己の獨創的なる宗教を宣傳せしにあらず彼自ら實驗したる基督の福音の證人となつたのである。彼は基督の宗教を當時の文明の要素となりし羅馬人と希臘人との間に宣傳した。彼の傳道的活動に由て基督教は猶太の一隅に存在する一小宗派に非ずして弘く世界文明の潮流を指導する世界の宗教となり人類の救濟となつた。斯くして基督教は希臘人と羅馬人との要求に適應しその國語と同化しその社會狀態と密接なる關係を生じ或は是と調和し或は是と反對しその特徴を發揮すると共に種々なる變化を生じたのであつた。而してこの變化は唯に外形のみならず内部の要素にも多少の影響を受けたのである。最初に於ける猶太の基督者は唯基督を救主と信じその聖語に從ひ神の國の實現を期待したる單純なる團體なりしが保羅の傳道に由て基督の教は世界的に發展する一大宗教となつた。故に保羅の使命は猶太的基督教を世界的基督教に發展せしめたことであつた。彼は基督が『禍なるかな』と呼び給ひし學者とパリサイ人の階級に屬し眞の宗教は神の選民たる聖き民族の有する律法なりと信じたる純粹なる猶太教の信者であつたが。彼が神の民として自ら任じかつ誇りたる猶太人の希望の中心なりし救主を異教徒として侮り異邦人として賤めたる民族の中に紹介したることは興味深き問題である。彼が斯る變化をなしたるは何故であつたか。是れ彼が特に神に召され基督に選ばれたるなりとの使命の自覺に外ならぬのである。

保羅が斯る使命の自覺を切實に感じたことは彼の書翰に由て確かなる證明を提供して居るのである。彼はガラテヤ書に於て大膽にして自信深き告白をなして、

『人よりに非ず
また人に由らず
イエスキリストと
彼を死より
甦らしゝ
父なる神に由て
立てられたる
使徒パウロ』

と言ひ。又彼は、

『兄弟よ我汝に示す
我が曾て
爾曹に傳し所の福音は
人より出るにあらず
また敎へられず
ただイエスキリストの
默示に由て受たればなり』

と證明した。彼は更に

『されども
我が母の胎を出し時より
我を選びおき
恩惠を以て
我を召し給ひし神
その子を
異邦人の中に
宣しめんがため
心に善として
彼を我心に
示し給へる其時
われ血肉と謀ることをせず
又我より先に
使徒となりて
エルサレムに
あるところの者にも往かず
アラビヤに往き
ダマスコに歸れり』

と記して居る。彼が『異邦人の使徒』として基督敎を世界的に宣傳する活動家としての自覺は斯くも深刻なるものであつた。彼の信仰、彼の傳道、彼の事業、彼の活動は直接に神の命令であつた。直接に基督の默示であつた。彼の事業は彼自ら選びたる事業にあらずして彼が世界に生れざる前より神の意志に由て定められたるものである。彼は異邦人に傳道する爲に生れたのである。彼が福音宣傳の使

命は彼が世界に生存する運命と一致して居たのである。

保羅は更にコリント後書に於て彼が崇高にして深遠なる使命の自覺を絶叫して居る。

『我儕キリストにより
神に向ひて
此の如き信仰あり
然ど我儕己に由て
自ら何事をも
思ひ得るにあらず
我儕の思ひ得るは
神に在り
かれ我儕をして
新約の役者となるに足らしむ
儀文に事ふるにあらず
靈に事ふるなり
そは儀文は殺し

靈は生せばなり』

と。彼は又記して居る、

『我儕自己の事を
宣るにあらず
たゞイエスキリストの
主たること
又我儕イエスに由て
爾曹の僕たることを
宣るなり
光に命して
暗より照出でしめたる神
我儕をして
イエスキリストの顏にある
神の榮光を知るの光を
顯さしめんために

我儕の心を照し給へり』

と。かつ彼は

『一切のもの神より出づ
彼キリストに由て
我儕をして己と和がしめ
且その和がしむる職を
我儕に授く
即神キリストに在て
世を己と和がしめ
その罪を之に負はせず
且つ和がしむる言を
我儕に委ね給へり
是故に我儕召されて
キリストの使者となれり
即神我儕に託り
爾曹を勸め給ふが如く
我儕キリストに代て
爾曹が神に和がんことを
爾曹に求む』

と確信したのである。此等の告白によれば保羅は直接に神より召されたる者にして自己の主義を主張するにあらず惟だ神の意志に從ひ耶蘇基督の救主なることを證したのである。彼は基督の人格に神の人格を認め、基督の顏に神の榮光を仰いだ、基督が神と人とを睦み和がせ給ふ如く彼は基督者と神及基督とを睦み和がしむるものであつた。且保羅は精神界の王なる基督の代表者にして彼は神の國の全權大使なりとの自信と自任と實力とに充實して居た。この他テサロニケ前書二章、コリント前書四章、ローマ書一章、エペソ書、コロサイ書に於て彼が如何に異邦人の使徒たる天職に對し高尙なる思想と熱烈なる信仰とに充實して居たかが記してある。彼は常に『神と偕に働くもの』なりとの活ける自信があつた。彼には『神の國の同勞者』たる鮮明なる自覺があつた。

救主基督は曾て、

『われ父に居り
父の我に居ことを

信ぜざるか
われ汝等に語りし言は
自ら語りしにあらず
我に居る父
そのわざをなせるなり』

と敎へ給ひし如く保羅は神の意志を宣べたのである。彼は神に由て活き動き語つたのである。彼は神の語を彼の語に由て他に傳へた。彼は神の生命を彼の生命に由て他に分け與へた。保羅には總ての人に對して基督の十字架と復活の深奥なる意義を證明するために剛健にして雄大なる心が躍つて居た。彼はローマ書に於て、

『我はギリシャ人異邦人
また賢き人
及愚かなる人にも
負へる所あり
この故に我力を盡して
爾曹ローマにある人々にも
傳んことを願ふ
我は福音を恥とせず
この福音はユダヤ人を始め
ギリシャ人
總て信ずる者を
救はんとの
神の能力なればなり』

と記した。保羅は神と人と基督と人との紹介者であつた。彼は斯る使命の自覺を有したると共に彼の全身全靈をこの使命に献げ彼自ら犧牲的苦難を實驗したのである。彼は基督と人とが靈的平和の關係を保つ聖き處なる敎會のために苦難に逢ふことを無上の歡喜となした。彼はこの使命を實現するために犧牲的の苦難を喜んで受けた。彼ば『基督の僕』となり又『基督者の僕』となつて献身的の奉仕をなすことを感謝するに至つた。

保羅は斯く自己の使命に就て雄大にして高遠なる思想を有したるが基督に對しては實に謙虛にして柔順であつた。基督は保羅の上に超然として尊貴なる位置を占め給ふたのである。保羅の宗敎的實驗に由れば基督は主にして保羅は僕であつた。基督は無罪にして保羅は罪人の長であつた。基督は祈らる

る者にして保羅は祈る者であつた。基督は拜まるゝ者にして保羅は拜む者であつた。基督は救ふ者にして保羅は救はるゝ者であつた。基督は自らの權威に由て敎へ保羅は基督の權威に由て敎へた。基督は命令し保羅は服從した。基督は神の獨子として彼自らの人格に於て神を新なる意義に於て識り保羅は基督の使徒として基督の意識を通して神の意識に徹底した。保羅は自ら新なる宗敎の創建者なりとの自覺を有せず彼は基督敎の創建者なる基督の宗敎的實驗を證明した。其位置を比較すれば第一は神にして第二は基督である。而し保羅は基督の弟子であつた。斯る意識は保羅の全生涯に於て瞬間も彼の胸底より離れなかつたのである。彼は耶蘇基督と其十字架を宣傳することに熱中したのである。故に彼はコリント敎會に於て黨派の爭ありし時に、

『パウロは爾曹のために
十字架に釘けられしか
また爾曹はパプテスマを受て
パウロの名に入りしか』

と警告し。又彼は、

『爾曹はキリストのもの
キリストは神のものなり』

と曰ひ。基督と彼との關係を鮮明になした。彼は實に神より召されて基督より使徒たる天職を與へられた。彼は活ける基督に由て靈的に敎育せられ鼓吹せられて彼の傳道事業を經營したのである。この神聖なる使命の自覺を外にして保羅の生涯を說明することは困難である。此の自覺は彼が

『もしわれ福音を
宣傳ずば禍なり』

との燃ゆる精神となつたのである。彼はこの天職を遂行することを以て全世界に於ける最も幸福なる事業なりとの自覺と滿足と感興とに溢れて居た。又此精神は彼の、

『われ我が主
イエスの名の爲には
惟に縛らるゝのみならず
エルサレムに於て
死るも亦甘ずる處なり』

との抑ふ可らざる熱誠となつた。彼は己が天職のためには身命を顧みざる大なる決心があつた。故に彼はコリント前書に於て、

『それ十字架の敎は

亡ふる者には愚かなるもの
我儕救はるる者には
神の能力たるなり
即ち錄して
我智者の智を滅ぼし
慧き者の慧を空くせんとあるが如し
智者何處にある
學者何處にある
此世の論者何處にある
神は此世の智慧をして
愚かならしむるに非ずや
世の人は己の智慧を恃て
神を知らず
これ神の智慧に適るなり
是故に神は

傳道の愚かなるを以て
信ずる者を救ふを善とせり
ユダヤ人は休徴を乞ひ
ギリシャ人は智慧を求む
我儕は十字架に釘られし
キリストを宣傳ふ
即ち此は
ユダヤ人には蹶くもの
ギリシャ人には愚かなるものなり
されど召されたる者には
ユダヤ人にもギリシャ人にも
キリストは神の力
また神の智慧なり』

と絶叫して眼中に天下の智者なく學者なく世の毀譽褒貶は彼に於て何の價値もないのである。人は愚と呼び狂と評するも眞實に罪に死したる者を活かし新なる人格を創造するものは基督である。眞實に

墮落したる人の靈を覺醒せしめ永遠の生命に導き神の子たる新なる自覺を與へて救に入るゝ福音は基督の十字架を外にして何處にあるのであるか。基督の十字架の向ふ處、天下に敵なく、「基督の福音に由てのみ個人も家庭も社會も聖められ救はれるのである。基督の生命のみ道德的又心靈的の生命であるとは是が使徒保羅の確信であつた。是が世界的基督敎の宣傳者の自覺であつた。

第五章　保羅と基督

使徒保羅は嘗て基督敎の敵であつたが後ち其味方となつた。彼は熱心なる猶太敎の信者であつたが基督敎の堅固なる信者となつた。彼は偏狹なる民族的觀念に支配せられたものであつたが寛容なる人類的思想を抱くに至つた。斯く彼其の生涯に顯著なる變化をなし新なる生活に入りしことは世界の宗敎歷史に於ける偉觀である、而して彼がこの驚異に堪へざる靈的の變化は何處より來たのであつたか。これ保羅がダマスコの途上に於て直接に活ける基督に接し靈なる基督の聲に觸れたる心理的實驗に基いたのである。保羅は新なる生活に入りし後に於て如何なる信仰生活を送つたのであるか。彼が基督者としての根本的實驗は何であつたか。彼は其の信仰的實驗の記錄なるガラテヤ書に於て次の如き意義深遠なる告白をなした。

『我キリストと偕に
十字架に釘られたり
もはや我活るにあらず
キリスト
我に在て活るなり

今われ
肉體に在て活るは
我を愛して
我がために
生命を捨しもの
即ち神の子を
信ずるに由て
活るなり』

と。此告白は保羅が基督者としての生活を證する最も價値ある語である。彼が基督者としての理想的生活は實に基督を中心となす生活であつた。彼は何故に基督を中心となす生活を送ることを以て彼が無上の理想となしたのであるか。彼は、

『われキリストと偕に
十字架に釘られたり』

と言つた。此語は何を意味するのであるか。保羅は基督が十字架に釘られ人類の罪を救はんために死し給ひし如く過去の保羅、猶太教徒としての保羅、律法に由て救はれんと熱中し却て律法の奴隷となりたる保羅、內心の罪惡に勝たんとして却て敗れたる保羅は基督の靈的光明に照され活ける基督の靈に觸れたる時に全く死んだのである。舊き彼は全く死して新しき彼となつた。罪の彼は全く死して義の彼となつた。奴隷の彼は全く死して自由の彼となつた。律法の彼は全く死して恩惠の彼となつた。彼の基督と偕に十字架に釘らるゝと同時に其舊き生活は全く死したのである。保羅は斯く舊き生活の死滅、舊き自我の埋葬の後に於て如何にしたのであるか。彼は斷言した。

『もはや我活るにあらず
キリスト
我に在て活るなり』

と。保羅は自己の總ての暗黑、總ての煩悶、總ての不義を基督の感化に由て殺したのである。換言すれば舊き彼の自我は靈的には既に死したのである。彼は今もはや舊き彼ではない新なる彼である。彼の思想、感情、意志は新なる思想となり新なる感情となり新なる意志となつたのである。基督が人類の罪のために死し人類に生命を與ふるために復活し給ひし如く保羅は自我を中心となす生活より死して基督を中心となす生活を送るために復活したのである。彼は暗黑の民としては死し光明の民として活きた。彼は惡の子としては死し善の子として活きた。彼は罪の友としては死し神の友として活きた。彼は亡びの人としては死し生命の人として活きたのであつた。斯くして彼は、

『もはや我活るにあらず
キリスト
我に在て活るなり』

との自覺に徹底したのである。これ如何に驚くべき告白ではないか。また如何に美麗なる實驗ではないか。保羅はもはや自我の慾望、自我の快樂、自我の罪惡のために活きないのである。彼の胸中は虛心坦懷、光風霽月の如く何等の虛僞なく、何等の暗黑なく、何等の傲慢なく、純清潔白にして基督は保羅の心の內に存在し給ひ、保羅は基督の靈と同化したのである。彼は基督に於て眞正の自我を發見した。彼は基督に於て眞正なる神の子の姿を發見した。斯くして彼は人間生活の最も高尙なる目的なる理想的の神子と偕に活き、彼自らも神の子の一人となれる自覺に徹底したのである。

この保羅の信仰的實驗を譬て言はば宛もかの爛熟たる萬朶の櫻が朝日に輝きつゝ咲き匂ふ芳野の山に杖を曳く者が、滿山の風趣、花か雲か、雲か花か、百華の美を競ひ芳を鬪はす絕景の中に立て。その花を眺め、その花を賞し　その花に憧れ、その花に醉ひ、無意識の中に其美に同化せらるゝ時に。我は自ら斯あらんことを努めたのではない。我は唯身はこの花の山の中に逍遙してその高潔、その優雅、其美麗、其天眞なるに心を打たれ。我は花か、花は我か、我花の中にあるか。花我の中にあるか、我は唯花の美に化せられて我が心は美的情趣に滿たされ、我は美の化身となるが如く。基督に對する保羅の靈的情趣は實に幽妙にして神秘なるものがあつたのである。彼が基督の天眞爛熟なる愛の櫻花に憧れ、その聖美なる人格の感化に醉ひ、基督を愛慕し尊崇し禮拜したる時に。保羅は基督か、基督は保羅か、もはや保羅活るにあらず基督は保羅となりて活き給ひし信仰生活の妙境に逍遙したのである。

保羅が斯る神秘にして幽玄なる崇高にして偉大なる自覺に徹底したのは何故であつたか。彼は證明した。

『今われ肉体に在て活るは
わが爲に生命を捨しもの
即ち神の子を信ずるに由て
活るなり』

と。保羅は何故に此世に生存したのであるか。彼が生活の第一義は何であつたか。彼が現實生活のために克己し努力し勤勞し汗を絞り涙を流し時としては血をすらも要求せし生の苦痛と哀愁と悲慘とに耐へて社會と同胞のために獻身的の生活を送り得たのは何のためであつたか。保羅が基督を中心とす生活を送り新なる生涯に入りて信仰生活の新天地に逍遙するに至つたのは何のためであつたか。これ他ではなかつた。即ち『我が爲に生命を捨しもの』廣義に漠然たる人類と言ふが如き意義ではな

い。實に個人的なる『我がために』である。保羅彼自身のためである。即ち保羅の義と、保羅の自由と、保羅の向上と、保羅の生命と、保羅の救の爲に尊とき生命を與へ給ひし基督のために彼は活きたのである。彼は『我が爲に』なる語に深き意義を含ましめしのみならず。更に彼は『己を捨し者』なる語に高貴なる意義あることを高調した。彼は唯高尚なる教訓を與へ給ひし基督に感激したのみではない。彼は唯正義、仁愛、謙遜、柔順、献身を說き給ひし基督に敬服したのみではない。彼は唯天父の愛、人類の同胞主義、罪人の救、神の國の福音を宣傳し給ひし基督に信賴せしのみではない。保羅は實に基督の非凡なる人格に感激したのである。基督の充實したる生命に敬服したのである。彼の爲に生命を與へ給ひし基督の無限なる愛の力に献身したのである。全世界に於て最大の勢力を有する眞實なる愛よ。嗚呼基督の無限無量なる愛よ。自己の生命を犧牲となして罪人を救ひ給ふ永遠不朽の愛よ。此愛には神秘の力がある。論理に超越したる生命がある。神學に超越したる感化がある。實利に超越したる權威がある。保羅は生命を捨てゝ生命を與へ給ふ基督の愛の力に由て動かされたのである。基督の絕大無邊なる愛の力は保羅の舊き生活を破壞した、彼の罪の生活を破壞した、彼の自我的生活を破壞した。而して彼は全く基督の心に同化せられたのである。故に彼はローマ書に於て絕叫した。

『それ義人の爲に死る者
殆ど稀なり
仁者の爲には死ることを
厭はざるものもやあらん
されどキリストは
我儕の罪人たるとき
我儕の爲に死に給へり
神は之に由て其愛を彰し給ふ』

と。彼は又コリント後書に記した。

『キリストの愛我を勵ませり』

と。保羅は更に

『即ち神の子を信ずるに由て活るなり』

と言つた。

保羅は嘗て熱烈なる猶太教徒であつた。彼はモーセの律法を尊信し是を實行することに由て救はれんと試みた。彼は舊約聖書の愛讀者であつた。彼は建國以來、祖國の歷史に輝く政治家、愛國者、道德家、國王、詩人、預言者、英雄、豪傑、聖人及君子の言行に由て修養し鍛錬する處があつた。しかし

彼は眞正なる靈の正義、靈の平和、靈の歡喜、靈の恩惠に充實することが出來なかつた。然るに彼は彼の爲に生命を捨て給ひしもの即ち『神の子』に信賴した。彼は神の子耶蘇基督に絶對の服從をなし絶對の信賴をなし絶對の献身をなしたる時に彼の胸中には豁然として自覺する所があつた。彼の靈眼一たび開かれて天地は面目を一新した。彼は十字架の上に於て彼に新なる生命を與ふる爲に死し給ひし神の子に無上の尊崇を献げたる時に彼の心の奥に神秘なる力を得たのである。而て神の子基督は彼の心を聖め慰め高めかつ强め給ふ實驗を得た。彼は實驗の告白に於て次の如く語つた。

『われ願ふ處の善は
　之を行はず
　却て願はざる所の惡は
　之を行へり
もしわれ願はざる所を
　行ふときは
　之を行ふ者は我に非ず
　我に居る所の罪なり
　そは我内なる人に就ては
　神の律法を樂めとも
　わが肢體に他の法ありて
　わが心の法と戰ひ
　我を捕虜にして
　我が肢體の中に居る
　罪の法に從はするを悟れり
　嗚呼われ困苦人なるかな
　この死の體より
　我を救はん者は誰ぞや
　これ我儕の主
　イエスキリストなるが故に
　神に感謝す』

と。保羅は律法と良心に由て罪の力に勝たんと努めたのであるが、是を實行して益々煩悶と苦痛に陷つた。彼は形式と道德に靈の救を求めたるも與へられなかつた。彼は聖賢の道に從て精神の自由を得んと欲したるも不可能であつた。彼は惟神の子耶蘇基督を信じたる時に彼の胸中には一點の不安がな

くなつた罪の力は消え失せた心の秩序は恢復した。彼は神秘にも靈の平和と慰安と生命と歡喜に充實した。

斯く保羅が基督を中心となす生活は實に基督の十字架を中心となす生活であつた。彼が十字架を中心となす生活は基督の犧牲的なる生活を中心となす生活であつた。彼が基督の犧牲的なる生活を中心となす生活は神の子の愛を中心となす生活であつた。是れ保羅が實驗したる基督の福音である。彼はコリント前書に記して、

『夫れ十字架の敎は
亡る者には愚なるもの
我儕救るゝ者には
神の力なり』

と言つた。彼は又

『われイエスキリストと
彼の十字架に
釘けられし事の外
爾曹の中に在て
何をも知るまじと
心を定めたればなり』

と告白し。又彼は、

『猶太人は休徵を乞ひ
希臘人は智慧を求む
我儕は十字架に釘けられし
キリストを宣傳ふ
即ち此は
猶太人には礙くもの
希臘人には愚なるものなり
されど召されたる者には
猶太人にも希臘人にも
キリストは神の力
又神の智慧なり』

と證明した。

斯く保羅の傳道が基督の十字架を中心となせしことは彼の信仰生活が十字架を中心となしたるが故である。彼は基督に反對し基督者を迫害したる時に基督は彼を救はんとて生命を捨て給ふた。且保羅は基督の福音に反對し罪人の首長なりしに係はらず基督は彼を愛し彼を選び彼を召し彼に現はれ彼を福音の證者となし給ふた。この無限なる愛に對し保羅は感奮せずに居られなかつたのであらう。彼は斯る實驗に由てピリピ書に記せる如く、

『我が活るは
　キリストのため
死るもまた
　我が益なり』

との生死にも存亡にも惟救主のみを中心となす生活の絶頂に達したのであらう。

第六章　保羅と主なる基督

保羅はダマスコの途上に於ける神秘なる靈的の實驗に由て彼の生活に根本的の變化をなし新なる生活に入つた。彼は自我を中心となす生活より超越して基督を中心となす生活に向上したのである。而して基督と保羅とは同心一體となつた。保羅は基督か、基督は保羅か、基督は保羅の心の内に住み、保羅は基督の心に化せられて居た。彼は

『もはや我活るにあらず
　キリスト
我に在て活るなり』

との信仰生活の極致に達した。彼は

『我が活るは
　キリストのため
死るもまた
　我が益なり』

との献身的生活の神髄に徹底した。斯して保羅は基督のために活き、基督のために仕へ、基督を愛し

基督のためならんには死るも活るも無上の歡喜を感ずるに至つた。保羅の信仰生活は宛も死るも活るも君の心に從ふ忠臣の如く、死るも活るも親の心に從ふ孝子の如く、死るも活るも夫の心に從ふ貞婦の如くであつた。彼は基督の人格に憧れ基督の愛を慕ひたるために靈的生命に充實し高尚なる事業を經營し堪へ難き苦難に勝ち非凡なる祝福を受け同胞に幸福を與へた。斯く基督に信頼したる保羅は耶蘇基督を如何に解したのであるか。

保羅は耶蘇基督を『主』として信頼した。彼はローマ書に於て

『そはもし爾口にて
　主イエスを認はし
　また爾心にて
　神の彼を
　死より甦らせしことを
　信せば救るべし』

と記して居る。彼が信仰告白の第一は耶蘇基督を主と崇むることである。彼は基督を主なりと崇敬したるためコリント後書に記して、

『我儕自己の事を宣るに非ず
　惟キリストイエスは
　主たること
　又我儕イエスに由て
　爾曹の僕たることを宣るなり』

と言つた。この語によれば保羅の信仰に於ける基督は主なる基督であつた。彼は基督をたゞ基督者の主なりと信じたるのみならず萬民の主なることにまで擴大した。彼はローマ書に

『ユダヤ人とギリシャ人の別なし
　そは總のものゝ主は惟一なればなり
　凡そ之を呼びもとむる者には
　惠を豊にし
　凡て主の名を呼び求る者は
　救るべし』

と記して居る。更に驚異に堪へざることは保羅が主なる基督を萬有の支配者と信じたことである。彼はコリント前書に

『そは神すべての物を

キリストの足下に
置き給へり』

と言つて居る。彼はピリピ書に於て主なる基督を歎美し敬仰して、

『こは天に在もの地にあるもの
及び地の下にあるものをして
悉くイエスの名に由て
膝を屈めしめ
且諸の舌をして
悉くイエスキリストは
主なりと稱揚して
父なる神に
榮を歸せしめんためなり』

と記した。釋迦は天上天下唯我獨尊と云ひ人天の師を以て自ら任じたのであるが。保羅は基督を以て天にあるもの地にあるもの地の下にあるもの〻主なりと認めたのである。更に保羅が基督に對して用ひたる主と云ふ語は舊約書に記さる〻エホバと同じ意義を含んで居た。故に彼が信賴したる基督は神

と同じく尊崇せらるべきものである。彼は『我儕の主』又は『イエスキリスト我儕の主』なる語を幾十回も彼の書翰の中に記した。而して此語には深遠なる意義を含蓄して居た。

即ち彼は基督を主として禮拜した。故に基督は保羅の生活上に一種獨特の權威を有し給ふた。彼が崇め尊みたる基督は希臘のプラトウ及ソクラテスよりも優りて尊貴であつた。羅馬のセネカ及シセロよりも更に卓越して居た。猶太のモーセ及イザヤよりも更に神聖なものであつた。基督は人類の主萬有の主にして神と同じく禮拜の對象となるべきものである。基督は神と同じく人類より祈禱を捧げられ給ふ主である。保羅のこの神秘なる信仰は實に人類の最も深き宗教心の天眞なる發現である。眞實なる宗教的熱誠なるものは惟ある宗教の開祖の高尚なる人格と純潔なる教訓とを模範とせる單純なる生活を以て滿足することは出來ない。敬虔なる信仰生活はその深くなり高くなり熱くなり聖くなるに從ひ信仰の對象となれる人格を慕ひ憧がれ愛することより更に進んで其ものを拜む憧の極み愛の極みに達せざれば滿足すると能はざるものである。禮拜の對象に向て心の誠を告げ心の秘密を訴ふるまでに至らざれば信仰生活の妙味を解することが出來ないのである。保羅は基督に對し惟其教訓と人格とを尊敬し是を道德上の模範とするに止らず。彼は基督の尊とく聖く美しく深く高きに慈み敬服し感激し慕ひ憧がれ更に生命を献げて拜みかつ祈つたのである。彼は基督の弟子トマスと同じく『我が主よ我が神よ』と叫び基督に絶對の歸依と絶對の信賴と絶對の献身とをなし基督を禮拜し基督に祈禱する信

仰生活の妙境に達したのである。

我國に於ける信仰的偉人日蓮上人はかの龍の口の遭難より不思議に遁れた。彼は佐渡の國依智の里に流され後に大野の郷の塚原に追放せられた。彼は一間四方にも足らざる破れ果たる辻堂の如き處に置かれ屋根は朽ちて雨と雪とを防ぐに由なく風を避くるに戸もなく寒さを凌ぐに床もなかつた。彼は冷なる土の上に藁の席すら敷かさる處に居た。折しも凍えたる空より降る來る白雪は紛々として彼の顏を打ち、肌を裂くが如き凜烈なる北風は吹き荒んだ。彼が墨染の衣の袖は氷にて綴られた。彼は北國の寒さ强き霜月の初に當り離れ小島の中に在り、冬の日の骨も碎かるゝが如き寒氣に、暖るに火なく食するに糧なく、今は餓死するか凍死するか彼の生命は旦夕に迫つた時に彼は深く覺悟する所があつた。彼は肌に着けて守本尊とした釋迦の像を雪の上に安置し磐石の如き座を定め掌を合せて經文を讀んだ。彼は昔釋迦が雪山の麓に苦行し給ひし時のことを想ひ起して斯くありなしらんと靜思した。彼は心を決し我は法華經の爲ならんには死なば死すべし身は惜からずよしや凍餒此身に迫りて屍を降り積る雪の下に埋るとありとも、敎の主法の師たる釋迦佛の心に適はんには露恨なしとて五日の間雪より外は咽喉を潤ほす者なく佛の法を糧となしたのである。此日蓮上人の心に絶對の歸依と信賴との活ける模範がある。彼が釋迦を敎の主、法の師として尊信し禮拜したる處に彼の熱烈なる確信が躍如として現はれて居る。彼は釋迦に對し死にも饑にも凍にも神色自若たる信念があつた。彼の偉大なる人格は實に茲に存するのである。保羅は耶蘇基督を主として崇め神として拜んだ。故に彼は基督の爲に彼の智識、才能、位置、人格を皆な献げた。彼はピリピ書に於て、

『我わが主
　イエスキリストを識るを以て
　最もまされる事とするが故に
　總のものを損となす
　我キリストのために
　既に此等の總のものを損とせしかど
　之を糞土の如く思へり』

と記し使徒行傳に於て

『われ主イエスキリストの名の爲には
　惟に縛らるるのみならず
　エルサレムにて死るも
　亦甘する處なり』

との熱烈なる献身的精神に燃やされた。彼は生死存亡主と偕にする偉大なる精神に躍つて居た。彼が

基督を中心となす生活は基督に献身する生活であつた。而して彼が基督に献身する生活は基督を禮拜する生活であつた。斯く保羅は基督を古今獨歩の宗教的天才と認るのみならず、世界最大の宗教家として尊むのみならず理想の人格として憧るゝのみならず更に進んで基督を救主として拜んだのである。これ實に初代基督者の信仰であつた。かの舊約聖書に於ける信仰的人物の代表者なるヨブが人生の不幸に泣き現世の哀愁に苦みたる時に最愛の妻すらも彼の心を解せず神を呪うて死せよと語れるに對し

『假令神われを殺すとも
我は彼に從はん』

と言ひし如く保羅は基督を主と信じ彼の心の總てを献げて居た。

第七章　保羅と罪なき基督

保羅は基督を主なりと信じたると共に『無罪』なりと信じた。彼は基督をローマ書に於て、

『聖善の靈』

と呼んだ。彼はコリント後書に基督を、

『罪を知らざる者』

と言つて居る。

古來猶太人は他の民族よりも罪の觀念が極めて深かつた。モーセ、ダビデ、イザヤ、エレミヤの如き預言者、詩人、國王は何人も一般人民の罪惡と共に彼等自らの罪惡に就て切實なる感覺があつた。東洋の聖賢にして『義を見て移ること能はず不善改むること能はずこれ我が憂なり』と告白して自己の短處を深刻に自覺した者があつた。保羅自らも『われ願ふ處の善は之を行はず却て願はざる處の惡は之を行へりあゝわれ困苦る人なるかな』と絶叫し又彼は、

『我は罪人の首なり』

と言つた。又希伯來の詩人も、

『天下に義人なし

一人もあることなし』

と歌ふた。斯く人の生活する處に罪のために苦悶せざるものは實に少いのである。特に罪に對する感覺の鋭敏なる民族と思想の中に成長し自ら罪の勢力の猛烈にして懼るべきことを實驗したる保羅が基督に對してのみ『罪を知らざる者』と云ひ又『聖善の靈』と稱へたことは驚べきである。保羅の思想に由れば基督に就て、

『即ち己が子を
　罪の肉の形として』

と記し又彼はテモテ前書に於て、

『神肉體となりて現れ』

と言ひ。基督は人の如き身體を有し人の肉體の内に住み給ふた。この人の形狀を取り給ひし基督は神聖にして全く罪なき救主であつた。斯る信仰告白は驚異と歎美に堪へざる歴史上の神秘である。基督は罪なき救主、罪を知らざる人物である。フヰヒテーの言へる神と人との意識的一致と靈的の調和とを實現したる人格は基督ではないか。これ人類の道德的進歩の歴史に於ける最大の奇蹟ではないか、古往今來、世界東西の歴史に於て基督の如く神聖にして高潔なる人格が何處にあるであらうか。基督はかの有名なる畫家が茫々たる荒野の中にて天眞爛熳に咲き匂ふ幽雅にして純潔なる白百合を以て聖母マリヤを表現せしむるに彌優りて天眞であつた。また基督はフラエンジエリコが聖なるかな聖なるかな神の榮光の寶坐に於て神の稜威を讃め歌ふ天の使の繪に於て純白にして無邪氣なる嬰兒を以て代表せしめたるに彌優りて純白であつた。基督は千秋萬古の雪を戴て天空に聳ゆるヘルモンの高根の崇高なるよりも崇高であつた。基督は沈默なる深夜、四顧寂然として天高く氣清きベスレヘムの蒼空に於て永遠無限の靈光輝き美妙にして神秘なる生命を默示したる紫の星影の神聖なるよりも神聖であつた。基督は草綠に花紅に鳥歌ひ蝶舞ふシャロンの野邊に可憐にして美麗に薫る野の花の清美なるよりも清美であつた。實に基督の聖き心は神の聖き心であつた。神の聖き心は基督の聖き心であつた。

保羅はこの神聖にして高潔なる天眞にして爛熳なるこの單純にして清白なる靈妙にして美麗なる罪なき基督に依頼し憧憬した。彼はヘーゲルの言へる神人一致の理想を實現し給ひたる基督を禮拜した。彼はカントの言へる理想的完全の表號なる基督に心醉した。彼はリヒテルの言へる神聖なる人物の中にて最も偉大なるもの偉大なる人物の中にて最も神聖なる人物なりし基督に献身した。保羅は實に世にも驚くべき罪なき基督を信じたのである。

人格あるものゝみ人格あるものを起し、信仰あるものゝみ信仰あるものを起し得るのである。罪ある者は罪人を起すのみである。而して罪なきものゝみ罪あるものを救ふことを得るのである。罪より超

然たりし基督、罪より自由なりし基督、罪なき基督のみ人類を罪より救ひ給ふのである。保羅が信じたる基督は如何なる罪人をも救ひ聖め罪に勝つ者とならしめ給ふ罪なき救主であつた。

第八章　保羅と第二のアダムなる基督

保羅の宗教的實驗に於て注意すべき事實は彼が基督を第二のアダムなりと主張したことである。彼はコリント前書に於て、

『アダムに屬ける
衆の人の死る如く
キリストに屬ける
衆の人は活くべし』

『それ人(アダム)に由て
死ること出て
人(キリスト)に由て
甦ること出てたり』

と記し人類の始祖なる第一のアダムは人を罪に墮落せしめたる者にして人類の救主なる第二のアダム即ち基督は人を罪より救ひ給ふのであると考へた。言を換へて云へばアダムは人を死に導き基督は人を生命に導き給ふのである。更に保羅は基督を天より來りし第二の人と言ひまた天の人なりと語りロ

ローマ書五章に於て彼は第二のアダム即ち基督を以て溢るゝ恵と義の賜物を與ふる人なりと信じた。彼は第一のアダムを彼の罪に由て萬民を罪人となしたる滅亡の代表者と認め第二のアダムを以て新なる人種の首長となし新なる人格の創造者となし聖き人の代表者と信じて居た。彼はローマ書に於て、

『是故に一人の罪より
罪せらるゝことの
凡の人に及し如く
一人の義より
義とせられ
生命を得ことも
凡の人に及べり
それ一人の逆に由て
多く罪人とせらるゝ如く
一人の順に由て
多く義とせらるべし』

と記して居る。此等の語を綜合して考ふれば保羅の信仰は如何にも深厚であつた。彼は第一のアダムがたゞ一人にて犯したる罪はその惡しき感化と懼るべき影響とを萬民に及ぼせりと信じた。斯る信念は古今東西の史的事實と一致して居るのである。一點の火が巨大なる都會を焦土となすが如く惟だ一人の惡しき感化が個人、家庭、社會をして衰頽せしめ滅亡せしむるのである。　如何に身體强健に智識聰明に、才能卓越し、手腕非凡に、巨萬の財產を蓄積するも、もし一人の罪ある者起りその勢力にして跳梁跋扈せんか、其人、其家、其國、其民は墮落し滅亡するのである。第一のアダムの罪の結果と遺傳とは總ての人を罪に導き不幸に陷らしめ亡びに到らしむるのである。是に反して第二のアダムなる基督の惟だ一人の義、その感化その影響は總ての人に及び生命と幸福と向上とに到らしむるのである。換言すれば第一のアダムの如く神の命令即ち絕對の善に從はずして惡魔の誘惑即ち惡の勢力に從ひたる者は亡るのである。是に反して第二のアダムなる基督の如く神の意志即ち絕對の善に柔順にして善をなす者には限なき生命があるのである。即ち一人の神に逆ふ者あれば多くの神に逆ふ者の起る如く、一人の神に順なる者あれば多の神に順なるものが起るのである。善人は善人を起し、惡人は惡人を起すことは必然の法則である。基督は新なる人を創造し給ふ新人格の建設者である。基督の柔順、正義、善良、仁愛は總の人をして柔順、正義、善良、仁愛ならしむるのである。是れ靈的生活の神秘なるも心理的の事實である。第一のアダムは罪に負くる舊き人の始祖となつたが。第二のアダムは罪に勝つ新なる人の始祖となり給ふた。

この第二のアダムなる基督に由て第一のアダムの子孫にして罪人の首長なる保羅はコリント後書に於て、

『是故に
人キリストに在ときは
新に造られたる者なり
舊は去てみな新しく作なり』

と言ひ。エペソ書には、

『爾曹夙に習る舊人
即ち人を惑はす慾の爲に
壞らるゝものを脱ぎ
又爾曹の心の靈を新にし
神に象りて眞理の義と潔にて造れる
新人を衣るべし』

と記し。ガラテヤ書にも、

『それイエスキリストに於ては
割禮を受るも受ざるも益なく
惟新に作られし者のみ益あり』

と主張し。ローマ書に於ては、

『故に我儕その死に合ふ
バプテスマに由て
彼と同に葬らるゝは
キリスト父の榮に由て
死より甦されし如く
我儕も新しき生命に行へき爲なり』

と證し靈的新生の實驗を得て居たのである。保羅は斯く新人格の始祖なる基督、義なる新人の創造者なる第二のアダムの感化に由て彼の內的生活の革命を成就したのであつた。

第九章　保羅と生前存在の基督

保羅は基督を非凡なる靈的天才として古今獨歩の宗教家として尊崇せしのみならず基督はこの世界に誕生する前より存在し給ひたることを信じて居た。彼はガラテヤ書に、

『時既に到るに及び
　神其子を遣し給へり』

と記しローマ書に於て、

『即ち己の子を
　罪の肉の狀となして
　罪の爲に遣し』

と云ひ基督は永遠より存在し人類の救のために神よりこの世界に遣はされ給ひたりと信じて居たのである。即ち基督は神の子にして神は世の罪人を救はんとて彼を世に遣し給ふたのである。保羅の信念に於ける基督は久遠常住の靈的存在者であつた。永遠不朽なる神的人格であつた。幽玄にして神秘なる靈的生命であつた。此永遠より神と偕に在ませし基督は非凡なる謙虛を以て世界に顯現し給ふたのである。換言すれば永遠の基督が史的基督となり給ふた。保羅はコリント後書に記して、

『爾曹イエスキリストの恩惠を知る
　彼は富る者なりしが
　爾曹の爲に貧き者となれり
　是れ爾曹が彼の乏に由て
　富る者とならんが爲なり』

と言つて居る。基督者が救主基督より受る恩惠は何であるか。是は基督の謙虛にして仁愛なる生活より來る祝福である。基督は天の人として又神の子として眞に富める者であつた。されど彼は人類を救ふために自ら好んで貧しきものとなり給ふた。是れ驚べき語ではないか。基督は自ら天より地に降りて人を地より天に導き給ふのである。彼は自ら卑しき位置に降りて人を高き位置に昇らせ給ふのである。彼は自ら苦しみて人を幸ならしめ給ふのである。彼は自ら乏しくなりて人を富ませ給ふのである。是れ實に基督が嘗て弟子に敎へ給ひし基督者の眞の精神を實現したものである。

『異邦の領主は
　其民を司どり
　大なる者彼等の上に權を操る
　これ爾曹が知る處なり

されど爾曹の中にてはしかす可らず
爾曹の中大ならんと欲ふ者は
爾曹に役るゝ者となるべし
又爾曹の中首たらんと思ふ者は
爾曹の僕となるべし
此の如く人の子の來るも
人を使ふためにあらず
反て人に役はれ
又多の人に代りて生命を與へ
其贖とならんが爲なり』

との基督の教訓は彼自らの生涯に於て實現せられて居たのである。これ基督者の奉仕の大精神である。保羅が信頼したる基督は天より地に來り、富める者にして貧しき者となり、貴き者にして賤しき者となり、大なる者にして小さき者となり、人を使ふ者にして人に使はるゝ者となり給ふた。彼は自ら謙りて人を高め給ふのである。彼は人に仕へらるゝよりも人に仕へ人に愛せらるゝよりも人を愛し人に與へらるゝよりも人に與へ給ひし救主である。保羅は斯る靈味深長なる意義に於て基督を信じたるが故に彼自ら基督の精神を體得したのである。彼はピリピ書に於て、

『彼は神の體にて居しかども
自ら其の神と匹くある處のことを
棄て難きことゝ意はず
反て己を虛ふし
僕の貌をとり
人の如くなれり
既に人の如き形狀にて現れ
己を卑くし
死に到るまで順ひ
十字架の死をさへ受るに到れり』

と歎美し敬仰して居る。此の信念は使徒ヨハネの言へる、

『それ道肉體となりて
我儕の間に寄れり
我儕その榮を見るに

實に父の生み給へる
獨子の榮にして
恩寵と眞理にて充てり』

との語と甚だ近き意義である。かく保羅は基督を神の化身なりと信じた。神子化身の神秘は基督教の幽玄にしてしかも價値ある眞理である。神が人となり、聖きものが汚れたるものと偕に住み、尊ときものが卑しきもの丶間に活き、罪なきものが罪あるものと偕に在り、大なるものが小さきもの丶僕となり、德あるものが德なきもの丶犧牲となる神子化身の眞理は社會進化の原動力にして人道實現の新生命である。保羅は何故にユダヤ人たる自負心をすて異邦人の使徒となりしことを誇となし敎法院の議員たる名譽の位置を棄て丶基督の貧困なる傳道者となつたのであるか。彼は羅馬の市民權を有し法律上特別の待遇を受けたるものがローマの世界に於て到る處奴隷の如く待遇せられかつ迫害の苦難に逢ひながら天國の民たることを無上の榮譽となしたのであるか。彼は當時敎育の一大中心たりしタルソに成長しエルサレムに於ては第一流の學者ガマリエルの門弟の秀才なりしが彼は彼の學問と智識を度外視して智者何處にある學者何處にある此の世の論者何處にあると絶叫したのであるか。これ彼は十字架の敎は亡ふる者には愚かなるものなるが、救はる丶者には神の力なることを實驗して居たからである。彼は基督の化身の眞の意義を解したるが故に彼の智識も才能も位置も名譽も皆な十字架の下に献げて十字架の證人となり十字架の僕となつたのである。神子化身の眞理に基き總ての基督者は保羅の如き奉仕の精神に燃えねばならぬ。此精神を以て個人を聖め家庭を聖め社會を聖めねばならぬ。生前存在の基督はヨルダン河畔ガリラヤ湖邊の歷史的基督である、この歷史的基督は復活し給ひし後に於て永遠無限に存在する活ける靈なる基督である。保羅の生命となりたる基督は斯る意義ある基督であつた。

第十章　保羅と靈なる基督

保羅が信仰生活の神髄は基督を中心となす生活である。彼が信仰の對象なる基督は主なる基督、罪なき基督、新なる人格の創造者なる基督、神の子の化身なる基督であつた。この基督は又靈なる基督であつた。

保羅が基督に就て信じかつ實驗したることに二種の注意すべき事實がある。其一は保羅が基督を崇め尊みて超越的の存在者なりと認めたことである。彼はピリピ書に、

『この故に神は甚しく
　キリストを崇めて
　諸の名に優る名を
　之に與へ給へり』

と記し。ローマ書に於て、

『罪を定る者は誰ぞや
　死て復よみがへり
　神の右に在て
　我儕の爲に禱告給ふ
　キリストなるか』

と云ひ。コロサイ書には、

『キリスト彼處にて
　神の右に座し給へり』

と告白した。彼は詩篇六十篇の思想に感化せられたるならんと思はるゝ程に基督の超越的存在を高調した。彼のこの思想は後世の基督教史に於て基督に關する教理の發達に一種の刺激を與へたのである。しかし保羅は基督の超越的存在を神學的に論證したるにあらず唯だ單純なる彼の信仰を通俗の語を以て表現したのであつた。次に彼は基督に對し神秘的の信仰を有した。即ち彼は基督を『諸の名に優る名』を以て尊みまた『神の右』に在し給ふ超越的の救主なることを認めたると共にこの基督は活ける靈なる存在者にしてこの世界の内に住み保羅と偕に在り彼の心の内に住み極めて近く極めて親しき關係ある救主なることを實驗した。彼はコリント後書に記して、

『主は即ち靈なり』

と云ひ。またコリント前書には、

『終のアダムなるキリストは

生命を與る靈なり』

『主キリストに合ふものは
一の靈となるなり』

と記し。ガラテヤ書には、

『もはや我活るにあらず
キリスト
我に在て活るなり』

『靈(キリスト)のある處には
自由あり』

と言つて居る。此等の語に含める保羅の基督に對する思想は實に宗教的價値の豊富なるものである。斯く基督は保羅と偕に甚だ近く交り、保羅の心の内に住み、保羅と偕に生活し給ふ極めて内住的の存在者である。基督は遙に遠く天に於て神の榮の寶座に在まし給ふのみならず甚だ近く甚だ遍くこの世界の内に在まして彼を信ずるもの丶心の内に活き給ふ救主であつた。『キリスト我に在て活るなり』との保羅の證言は彼が赤心の叫びである。彼が心理的に實驗したる基督は靈なる存在者であつた。この活ける靈なる基督は保羅の心の内に活き彼も亦靈的に基督の内に活きることを得たる所以であつた。保

羅と基督とは我儕の呼吸する空氣が我儕の内にあり我儕に滿ち我儕はこの空氣に由て生存するが如く保羅の心は基督の靈を呼吸して彼の内に滿たしめて居た。彼は幾十回も『キリストイエスに於て』『キリストの内に』また『基督に由て』と言ふ語を用ひた。この基督は猶太に生存し給ひし時の基督のみを意味するにあらず、嘗て過去の歴史に存在したる基督のみを意味するにあらず、保羅自ら新なる生活に入りたる後現在に於て實驗したる基督である。

保羅は書翰の中に靈なる語を用ひたることが少くなかつた。この語は肉なる語と反對したる意義を含んで居た。故に彼の靈と言ふ思想は肉にあらざる或もの地に屬せざる或もの物質的にあらざる或ものを意味せしことは確かである。彼は、

『肉に從ふ者は
肉のことを思ひ
靈に從ふ者は
靈のことを思ふ
肉のことを思ふは
死なり
靈のことを思ふは

生命なり平安なり
もし神の靈爾曹に住まば
爾曹は肉にあらで靈にあらん
凡そキリストの靈なき者は
キリストに屬さる者なり』

と云ひ。また彼は、

『血肉は神の國を
つぐこと能はず』

と記して居る。彼の云ふ靈なるものは又ある體を有するものであつた。この體とは神秘なる靈體であつた。彼は神、靈、活ける基督を偉大なる實在者として實驗した。而して是は哲學者の抽象的觀念にあらずして宗教家の具體的對象であつた。彼の靈なる基督は神聖なる天の榮に輝く永遠無限なる活ける生命の源であつた。彼がこの靈なる基督と如何にして交通したかは既に彼が基督を中心となしたる生活に於て記したのである。彼は自らの實驗より靈なる基督と神秘的に一致融合することを得るは神の賜物なることを信じて居た。彼はコリント前書に記して、

『其神は誠なり
彼汝を召て
其子イエスキリストの
交際に入らしめ給へり』

『爾曹は神に由て
キリストイエスにあり』

と言つた。この點より考ふれば保羅は洗禮に由て基督との交に入りしにあらず洗禮は彼が基督との交に入りたる內的新生の外的證明であつた。また聖晩餐も彼が基督と靈的融和をなす最初の禮典にあらずして基督と彼との靈交を更に深くし更に親しくし更に徹底せしむる基督との交に入りたる後の靈的同化の禮典であつた。

保羅が靈なる基督と交るに至りたるは全く神の恩惠であつた。故に彼は、

『されど我此の如くなるを得しは
神の恩惠に由てなり
我に賜し神の恩惠は徒然ならず
我は多くの使徒よりも
多く勞れたり』

『こは我に非ず
　我と偕にある
　神の恩惠なり』

と言つて居る。彼は更に此靈なる基督と交りかつ同化するに就き次の如き確信があつた。

『われ此等の望を
　既に得たりと言ふにあらず
　亦既に全ふせられたりと言にあらず
　或は取ることあらんとて
　我惟だ之を追求む
　キリスト之を得させんとて
　我を執へ給へるなり』

と。又彼は、

『榮に榮え
　いやまさりて
　同じ肖像(かたち)に變るなり』

と確信し靈なる基督と彼との人格的同化を無上の希望となし歡喜となした。

斯く保羅は靈なる基督と同情同感に入り、基督の靈は保羅の靈となり。基督の靈は時と處の制限を超越して恒に保羅の内的生活に神秘なる慰安と光明と生命とを與へた。保羅はダマスコの途上にて神秘なる新生活の門に入りし時より彼が十字架の證人として自らも羅馬に於て殉敎者となりし時までこの靈なる基督は恒に保羅の心に住み給ふたのである。

基督は嘗て弟子に、

『神の國は
　爾の内にあり』

と語り、また、

『わが名に由て
　二三人のものの
　集る處には
　我もまた其の内にあり』

と敎へ、また、

『それ我は

世の終まで
恒に爾曹と偕にあるなり』

と告げ、また、

『われ爾曹をすてて
孤子とせず』
『汝等我に居れ
されば我また
爾曹に居らん』

と慰め給ひし如く、靈なる基督は保羅がアラビヤの寂寞たる境に瞑想したる時も地中海の逆風怒濤に漂ひし時もカイザリヤ及ローマの幽暗なる獄裡に呻吟せし時もまた彼がエペソに於て困苦窮迫し自ら勞働して生活を支へたる涙の中にも、彼が五回ユダヤ人より四十に一を減じたる鞭を受け、三回杖にて打たれ、一回石にて擊たれ、三回破船に逢ひ、一晝夜海に漂ひ、河の難、盜賊の難、同國人の難、異邦人の難、城の内の難、野の内の難に逢ひ、しばしば眠らず、飢ゑ、渴き、しばしば食を絶ち、凍え、裸なりし時も、更に日々彼に迫りし諸の教會の憂に逢ひし時も保羅は唯だこの靈なる基督を心に宿どし、彼自ら活きたるにあらず基督自ら彼の内に活き給ひ世の憂さ淋しさ苦しさに堪へさせ給ふたのである。靈なる基督は保羅が坐臥常住の友となり給ふた。故に保羅は基督の愛より天地萬有の如何なるものも彼を隔離すること能はざることを斷言した。彼は靈なる基督の愛に由て總ての事に勝ち得て餘りがあつた。

保羅はかの獨逸に於ける敬虔派の代表的人物とも言ふべきジンゼンドルフ伯爵が、基督の愛に感激しその聖き靈に滿され、身はサキソニー侯の宮庭に於て榮職にありながら、之を辭して福音の宣傳に從事せられた時の氣分と同じ氣分を持て居たのである。伯は日耳曼國内より土地僻遠なるバルチック沿岸にまで傳道旅行をなした。伯は粗末なる旅館に宿泊して巡回傳道をなせる時に伯の本邸では伯の起居に就て心を痛め伯は寂寞の感と孤獨の情に堪へず不自由なる旅の生活に困苦せらるゝならんと想像して心配しつゝあつた。然るに伯は如何なる寂しき地方を旅行し、又小さき旅館に宿り單純なる食事を取ることありとても、常にその愛し奉る救主基督が伯と偕に寂しき地方を旅し、伯と偕に小さき旅館に宿り、伯と偕に單純なる食事を取り給ふことを覺えて他鄕にあるも家庭に在て生活するが如く樂しかつたのであつた。靈なる基督が保羅と偕に在まし給ひしことはジンゼンドルフ伯と偕に在まし給ひし如くであつた。又かの英國歷史の一大異彩なりしクロンウエルの時代に革命が起つた。當時の國王チャーレス一世は哀れ斷頭臺上の露と消え失せた。之がために妙齡なる姫君エリザベスは寂しきワイトの孤島に幽囚せられ、美しき姫君はほの暗き獄の裡に悲しき日を送つた。或日獄卒は姫君の幽

閉せらるゝ一室に往いた。彼は姫君が冷なる寢床の上に靜に横はり永遠の安息に入れることを發見した。而して姫君の寢臺の上に一冊の聖書があつた。姫君は蠟細工の如き優さしき指を聖書の一句の上に置き、やせ衰へし玉顏に一種えも言はれざる喜びと平和の色とが現はれて居たとのことである。その聖書の語は。

『凡て疲れたるもの
又重を荷ふ者は
我に來れ
我汝等を休ません』

であつた。靈なる基督は幽暗なる獄裡に泣き、哀愁の想ひ胸に溢るゝ可憐なる姫君の心の內に活き給ふたのであつた。斯く保羅は靈なる基督と偕にあり。

『我心は慰めに滿ちて
喜餘あり』

と云ひ、

『われ如何なる狀に居るも
夫を以て足れりとすることを
學べばなり
我貧賤に居るの道を知り
又富に居るの道を知り
飽くことにも餓ることにも
豐かなることにも乏しき事にも
諸の事に於て
我之を熟錬せり』

と大悟徹底した。保羅は靈なる基督と偕にある時に樂天的生活を送り如何なる境遇も基督に由て聖化せられ人生は光明の樂土であつた。彼は基督と偕に活る時に見ること聞くこと想ふこと感ずることみな光であり讃美であり感謝であり平和であつた。基督に由て滿足の中に希望あり、努力の中に安息あり、苦痛の中に慰安あり、悲哀の中に感謝あり、十字架の中に生命があつた。故に彼は、

『我は我に力を與ふる
キリストに由て
諸の事をなし得るなり』

と斷言し、常に積極的に進取的に樂天的に基督の榮光を顯彰した。

嗚呼保羅の生涯は靈なる基督と融合同化して基督を主となし基督を友となし、基督と偕に日を送り、一日に於ける最初の思想は基督と偕に在て曙の雲を仰ぎ、一日の最終の思想は基督と偕に在て深夜の寂寞の裡に安眠するのであつた。彼は、

『食ふにも飲むにも
　惟イエスキリストの
榮のために之をなし』

た。是れ基督者の生活の妙趣に徹底した生活である。是れ人生の吉凶禍福を超越し心の内に無限の平和、慰安、希望、生命に充實せらるゝ生活である。是れ靈なる基督と偕に活る基督者の神秘なる信仰生活の歡喜である。是れ基督の感化によりて新人格を創造せらるゝ者の新天地である。

第十一章　保羅と信仰の意義

使徒保羅は信仰を如何なる意義に解釋したのであるか。彼が宗教生活の一大要素は信仰であつた。彼は嘗て猶太教の形式的なる律法に由て彼が内的生活の平和と道德的要求を滿足せしめんと努力した。しかし彼は深刻なる道德的の煩悶を經驗して猶太教の律法が彼に靈的の慰安と倫理的の生命とを與ふることの不可能なるを實驗した。彼は基督に對する信仰に由て彼が内的生活の最大問題を解決した。彼は信仰に由て神と和らいだ。彼は信仰に由て義しき者となつた。彼は信仰に由て神の子となつた。彼は信仰に由て救はれた。信仰は保羅が宗教生活の一大要素であつた。ローマ書に記さるゝ、

『義人は信仰に由て
　活くべし』

との語は保羅が實驗の聲である。聖オーガスチンが宗教生活に於て理性よりも意志を重んじ智識よりも信仰を貴みたるは保羅と同じく彼の宗教的實驗が彼の神學思想に現はれたのであつた。ルーテルが羅馬教の律法的、貴族的、傳說的、儀式的なる宗教生活を打破してプロテスタントの倫理的、平民的、聖書的、靈的なる宗教生活を絶叫したるもその根本思想は信仰に由て義とせらるゝ保羅の實驗的宗教の復興であつた。ジョンウエスレーが監督教會の禮典と儀式に由て聖き宗教生活に徹底せんと欲した

るも其目的を達すること能はず遂にガラテヤ書の神髄なる信仰に由て靈的の自由に徹底し信仰に由て内心の歡喜と慰安と生命とに充實し信仰に由て全く救はれ聖き神の子い生活に入りたるも保羅の實驗と相似たる點があつた。

保羅は彼が宗教生活の一大要素なる信仰を如何に解釋したのであるか。彼の信仰生活の發露にしてまた宗教生活の活歴史たる彼の書翰に由れば彼は信仰を以て或る傳説的の教理若しは信條を承認することのみなりと考へなかつた。彼の言へる信仰なるものは潑溂たる一種の勢力であつた。清新なる一種の生命であつた。神秘なる一種の感興であつた。無限なる一種の希望であつた。彼の信仰とは耶蘇基督に全人格を献ぐることである。耶蘇基督に絶對の信頼をなすことである。彼はガラテヤ書に、

『されど人の義とせらるゝは
律法の行ひに由るにあらず
惟イエスキリストを
信ずる由なるを知る
この故に
我儕も律法の行ひに由らず
キリストを信ずるに由て
義とせられんために
イエスキリストを信ず
そは律法の行ひに由て
義とせらるゝ者なければなり』

と記し、エペソ書には、

『我儕イエスキリストに在て
之を信ずるにより
臆せざることを得
憚ることなくして
神に近くことを得るなり』

と證し、ローマ書に、

『即ちイエスキリストを
信ずるに由て
その義を
神は凡ての信者に賜ふて

區別なし』

と云ひ、又ガラテヤ書に於て、

『爾曹は皆
キリストイエスを
信ずるに由て
神の子となれり』

と記し、コリント前書には、

『爾曹目を醒まし
堅く信仰に立て
丈夫の如く
剛かれ』

と述べ、コリント後書には、

『そは我儕
見る所によらず
信仰に由て

歩めばなり』

と勵まし、またガラテヤ書に、

『今われ肉体に在て活るは
我を愛して我が爲に
生命を捨しもの
即ち神の子を信ずるに由て
活るなり』

と感奮し、エペソ書には、

『又キリストをして
信仰に由て
爾曹の心に居らしめ』

と敎訓し、ピリピ書にて

『これキリストを獲
かつ信仰に基きて
神より出る義

即ち律法に由る
己が義にあらず
キリストを信ずるに由る所の義を有て
キリストの中に居り』

と告白した。保羅の實驗に由れば彼の信仰とは耶蘇基督を信ずることである而してこの信仰に由て義とせられ神に近づき神の子となり剛健にして希望に活る人となり基督のために生存し基督の精神を自己の生活に體得し基督と偕に生活することである。

斯く保羅が神の最高顯現なる基督に信頼し、基督に彼の全人格を献げて基督の心の儘に生活したる時に彼は靈的生命に充實したのであつた。彼が、

『もはやわれ活るにあらず
キリスト
我に在て活るなり』

との基督中心の生活は彼が基督に對する絶對の信頼より來たのである。また彼がローマ書に記したる、

『その身を
神の意に適ふ
聖き活ける祭物となし』

たる献身の生活は信仰の結果である。保羅は基督に心の總てを献げ總ての事たゝ基督の心を喜ばすを無上の光榮となしたる時彼の心には基督の人格より天眞に流露する諸の祝福を享けたのであつた。彼は耶蘇基督を信ずるに由て彼の靈的生活に於て『基督の愛』『基督の望』『基督の平和』『基督の惠』『基督の忍耐』『基督の眞理』『基督の慰』『基督の苦難』『基督の柔和』『基督の謙遜』『基督の力』『基督の生命』に就て深き實驗を得た。彼の書翰には此等の靈的祝福の實驗が充滿して居る。故に保羅の言へる信仰とは或る組織せられたる教理を受容することではない。又ある確定したる信條を信ずることでもない。惟耶蘇基督を信ずることであつた。換言すれば基督に献身し基督と靈的に交通し基督と意識的に一致し基督の靈は保羅の靈となり、保羅の靈は基督の靈となり。保羅の血は基督の血と感應し、基督の心の皷動は保羅の心の皷動と調和し、保羅と基督とは同心一體となることであつた。

斯く保羅の信仰には彼と基督との人格的一致と意識的の調和ありしため彼は基督より無限なる靈的祝福を得たのであつた。現代の神學者のみならず古代中世近世に於て保羅の思想と信仰とは時代の思想に由て研究せられまた解釋せられつゝあるのであるが。初代の教會に於て保羅が始めて彼の書翰を記したる時は彼が信仰の實驗を他の信仰の友に書き贈りたるものにして後の時代に神學の典據となり組織神學の根本的標準となるが如き思想は彼の夢想だにせざりし所である。保羅の書翰は神學の教課

書にあらずして宗教的實驗の記錄である。論理と思辨の產物にあらずして淸新にして單純なる靈の聲である。乾燥無味なる主理的、組織的、化石的の神學にあらずして生氣潑溂たる血あり涙ある偉大なる宗教家の至誠の絕叫である。保羅自らの靈的生命の活ける歷史である。故に保羅の救に就て考ふるに當り從來の神學思想に支配せられずして直接に保羅自らの信仰を識ることが必要である。是に就て次の事柄に就て考へねばならぬ。

保羅の信仰生活に於て注意すべきことは彼が人は神の前に罪に對する責任を負ふべきものにして不義なる者は義しき神の刑罰を受くべきものなりと考へたことである。猶太教及初代の使徒の信仰に由るも不義なる人は義なる神の前に己が罪の責任を負ふべきものであつた。如何となれば善と惡とは一致せず義と不義とは調和せざる故である。人類は始祖の墮落以來神の義に從はず罪惡に支配せらるゝ生活を送りつゝあつたが基督は此世界に生れ神の意志を人に示し人をして神の義に從はしめ給ふたのである。故に基督に從ひ神の意志を以て彼の意志となし給ふ基督と偕に生活する者は神の義罰より赦さるゝのである。保羅はコリント前書に於て、

『神は終まで爾曹を堅ふし
我儕の主イエスキリストの日に於て
爾曹の責なからしむ』

と記して居る。また彼はローマ書に、

『そは活かす靈の法は
イエスキリストに由て
罪と死の法より
我を釋せばなり』

と云ひ。基督に絕對の信賴をなし基督と偕に活る者は罪と死の力より自由にせられ暗黑と罪惡と死の勢力に支配せられず罪と死に勝つを得ることを證明した。保羅が信仰に由て義とせられたりとの實驗は斯く現在に於て暗黑と罪惡の勢力を征服し內的生活に於て恒に自由あり生命あり歡喜あり向上ある生活であつた。彼の信仰とはある教理又は信條を智識的に認むることにあらずして基督に信賴し神の意志に柔順に神の靈の感化に由て心に一種の新なる生命を所有することであつた。故に信仰に由て義とせらるゝことは基督と偕に活ることに由て人の心が義とせらるゝ宗教的の實驗其物であつた。換言すれば基督者は或る信條を承認するが故に直ちに義とせらるゝに非ずして基督の靈と偕に活る信仰其物に由て義き者とせらるゝのである。故に基督に信賴し基督と偕に活る基督者は現在に於て既に神の義に化せられたるものでなければならぬ。これ神の恩惠にして基督に由て與へらるゝ靈的祝福である。是は基督者の心に起る魔術的の變化にあらずして基督者の內的生活に於ける心理的又は道德的に實驗

せらるゝ變化である。斯く神の前に罰せらるべき罪ある者が基督に信頼し其感化を受け神の前に責なきものとせらるゝと是即ち信仰に由て義とせらるゝことである。されど茲に記臆すべきことは人が信仰生活に入り義しき者とせらるゝ生活を始めたる時に於て完全に義しき者となり終りたりと言ふのではない事である。換言すれば人は自己を中心となす生活より神を中心となす生活に向上したるが故に義しき者の仲間に入りたるものである。しかし其の人は未だ完全なる正義の理想に達したのではない神の正義なる目標は彼の眼前にあり彼は夫に向て第一歩を轉じたのである。保羅の思想に由れば信仰に由て義とせられたる者は現在に於て義のある部分を所有すると共に將來に於て義の總ての部分を所有することを期待するのであつた。故に彼はコリント後書に、

『凡て我儕帕子なくして
鏡に照すが如く
主の榮を見
榮に榮いや增りて
其おなじ像に化る也』

と記して居る。彼はコリント前書にも、

『我儕今鏡をもて見るごとく
見るところ昏然なり
然れど彼の時には
面を對せて相見ん
我今知ること全からず
然れど彼の時には
我が知らるゝ如く
我しらん』

と記して居る。保羅の信仰に由て義とせらるゝことは人間生活の根本的飛躍と共に永遠無限なる義の向上と完成を意味して居たのである。

保羅は神と人との關係を不義に對する義の審判なりと考へたると共に人は神の敵なりとの思想を有して居た。人は神を識らず基督に從はざる時に於て何人も神に逆ひ神の敵となりて生活しつゝある者なりとは保羅の思想であつた。即ち人は聖き神の前に汚れたる行ひをなし義しき神の前に不義なる生活を送り愛の神の前に利己なる心に制せられ神の友にあらずして神の敵となりて生活しつゝあるのである。斯くして人は神に逆ひて神の敵となり。神の敵となりて神に遠ざかり、神に遠ざかりて神を忘るゝに至つた。然るに基督來り給ひて人の忘れたる天の父なる神の愛を想ひ起さしめ、神の子供として

神の家庭に樂しき生活を送るべき者がこの父の家より遠ざかりて迷へるものを神に歸らしめ給ふた。基督は神の心に逆ひその敵となりたるものを神に近づけて神と睦み和らがせ給ふたのである。換言すれば神は基督に由て神に敵したる人を己に近づかせ且和らがせ給ふのである。故に人は嘗て神に敵したる者なるも救主基督に由て神と平和なる關係に入りまた父子の交情を恢復するに至るのである。故に保羅はローマ書に於て、

『是の故に我儕
　信仰に由て義とせられたれば
　神と和くことを得たり
　こは我が主
　イエスキリストに由てなり』

と斷言した。彼は又ピリピ書に、

『人の總て思ふ處にすぐる平安は
　汝等の心と意を
　キリストイエスに由て守らん』

と云つた。『總て思ふ處に過る平安』とは神と人との和合と一致より生ずる靈的の滿足と平和とである。

彼は又エペソ書に記した、

『キリストは
　我儕の和ぎなり
　之を一の新しき人に造りて
　和らがしぬ』

と。この語も神人の和合は基督に由て成就せらるゝことを證したものである。斯く神と人と睦み和らがしむる平和の福音は基督の福音である。神の敵をも神の子として向上せしむる靈界の救主は基督である。保羅は嘗て基督の敵なりしが基督の愛に由て基督と和らぎ基督中心の生活を送りし如く人は嘗て神の敵なりしも神の愛と基督の救に由て神と和らぎ神の子たる生活を送るに至るのである。

保羅は更に人は神に對して負債者なりとの思想を有して居た。彼は人の罪を負債と同一視したのである。即ち人が神に對して罪に罪を重ね惡に惡を積むことは借主が貸主に對し負債に負債を重ぬることゝ同一であつた。而して此罪の負債は如何にして免除せらるゝであらうか。此負債が基督に由て總て赦さるゝとは保羅の實驗であつた。保羅はこの實驗に就きコロサイ書に、

『我儕其の子に由て
　贖即ち罪の赦を得たり』

と云ひ。また、

『されど神爾曹をして
凡の罪を赦し
彼と偕に活かしめ』

と記した。彼はかく基督を罪の贖主と信じ總ての罪は基督に由て神の前に赦さるゝことを告白した。彼の思想に由れば人が神の前に責任を負ふべき罪の負債は人自ら是を償却することが出來ないのである。故に罪なき基督、罪を知らざる基督、純潔にして神聖なる基督が十字架の上に人の罪のために犧牲的の死を遂げ給ひ是に由て神に對し人の罪の負債を償ひ給ふたのである。且つ基督は神に對し人の罪を償ひ給ひしのみならず是と共に人を罪より自由にし義と愛と誠と喜びの子とならしめ給ふのである。

『我儕其の子に由て
贖即ち罪の赦を得たり』

との保羅の告白は實に茲に存するのである。

更に保羅は人を以て神の前に奴隷の如き生活を送る者なりと考へた。彼は書翰の中に幾回も僕なる語を用ひたるが此語は奴隷を意味するのであつた。

彼は或處に『肉の僕』と云ひ或處に『律法の僕』と云ひ、或處に「罪の僕」と云ひ、或處に『死の僕』と云ひ、或處に『偶像に仕ふる者』なる語を用ひて居る。斯く人は種々なる事物の僕となりつゝあるのであるが。此等の奴隷的なる生活と囚はれたる生活と自由なき生活は唯だ基督に由て解放せられ自由にせらるゝのである。保羅がガラテヤ書に、

『イエスキリスト
我儕を解て
自由を得させたり
是故に爾曹堅く立て
再び奴隷の軛に
繫ること勿れ』

と記したのは彼が實驗の聲である。彼は自我の自由を欲して却て自我の奴隷となる者より超越して自我を神と基督に献げて眞の自由を獲得したのであつた。善と人道に反對して精神の自由はない。善に從ひ人道に從ふて眞の心の自由がある。保羅は絶對の善なる神と人道の化身なる基督に服從して彼が內的生活の自由を得たのである。信仰の自由、思想の自由、良心の自由は基督の與へ給ふ祝福である。保羅は言つた、

『そは兄弟よ

爾曹は召を蒙りて
自由を得たる者なればなり』

と。囚はれたる内的生活より解放せられて自由靈活なる人となることは保羅の實驗であつた。基督は罪の奴隷となれる人を彼の犧牲的死に由て救ひ給ふのである。保羅のこの思想は彼が生存したる時代に於ける奴隷制度の風習より來たれるものではあるまいか。古代の風習に由れば主人より人格の自由を認められず生殺與奪の權を專らにせられたる奴隷が自由なる人として救はるゝに就ては次の如き習慣があつた。即ち奴隷の所有主は奴隷を伴ひて神殿に往き彼處にて所有主が奴隷より受くべき金錢を神殿の會計より受取り斯くして奴隷は神に由て贖はれ所有主の束縛より解放せられて自由なる人となるのであつた。保羅は斯る思想よりしてコリント前書に次の如き語を記したのではあるまいか。

『そは爾曹は
價を以て買はれたる者なればなり
是故に神のものなる爾曹
身に於ても靈魂に於ても
神の榮を彰すべし』

『爾曹は價を以て

買はれたる者なり
人の奴隷となる勿れ』

と。又彼はガラテヤ書に、

『これ律法の下にある者を贖ひ
我儕をして子たることを
得しめんためなり』

「もしわれ人の心を
得んことを求めば
キリストの僕にあらざるべし」

と言つた。罪の奴隷、律法の奴隷、此世の奴隷なりしものが基督の僕となり基督の所有物となり基督と偕に活る自由の子となり神の子の歡喜に入ることは保羅の信仰生活の妙趣であつた。世と罪との奴隷となる代りに世と罪に勝ち肉の囚れより超越して靈の自由なる子となることは如何に愉快なることではないか。これ實に神の子の聖き生活の悅樂である。これ靈的生活の歡天喜地である。これ、

『凡そ神の靈に導かるる者は
これ即ち神の子なり

爾曹が受し靈は
奴隷たる者の如く
復び懼を懷く靈に非ず
アバ父よと呼ぶ
子たる者の靈なり』

『爾曹もし子たらば又後嗣たらん
即ち神の後嗣にして
キリストと偕に
後嗣たる者なり』

との語を實現したる生活である。斯る生活こそ神の子の自由と特權と恩寵と歡喜と祝福に入りたる者の生活である。保羅の信仰生活に於て基督の靈なる感化は眞に偉大であつた。基督は保羅をして罰せらるべき者を赦さるゝ者となし、神に敵したる者を神に和ぐ者となし神に負債ある者を償ひたる者となし肉の奴隷たる者を靈の自由なる者となし罪の子たる者を神の子となし給ふた。是が保羅の救であつた。是が保羅の靈的生命であつた。是が保羅の信仰に由て義とせらるゝ意義であつた。是が保羅の信仰に由て聖めらるゝと基督の贖に由て罪の赦を受るとであつた。斯の如き信仰の實驗を玩味したる者は、

『是故に
キリストに在ときは
新に造られたる者にして
舊は去て
みな新しくなるなり』

との新なる生活を實現するのである。これ實に基督者の光榮であり歡喜であり生命である。

使徒保羅がダマスコの途上にて基督の新なる光明に接し新なる生命に觸れてより彼の生涯は二大時期に區別せられた。即ち舊き保羅は過ぎ去て新なる保羅は生れた。肉の保羅は死して靈の保羅は活きた。即ち舊き人、肉の人、罪の人、律法の人、アダムの人、死の人は、新なる人、靈の人、義き人、自由の人、基督にある人、生命の人となつた。

『舊は去りて
皆新しくなれり』

彼は最早肉と罪の人たることが出來ない。何となれば基督に從ふ彼は罪と肉とを皆な十字架に釘けて殺した者であるからである。即ち彼は罪に勝つ自由の人となりたる者であるからである。斯くして基督は律法の終となり給ひ保羅は世の儀式及律法に支配せられず基督の自由の靈に由て自由なる靈の生

活をなす者となつた。即ち儀文は死し靈は活かしたのである。宗教の形式は第二義にしてその生命は第一義である。

保羅は信仰に由て靈界の新天地に逍遙する人となつた。彼は基督を彼の內的生活の生命となしたる時に世界の總ての物に勝ち總ての物を支配する靈界の獨立自由を獲得した。天地萬有の間に於て何物も保羅の靈的生命と靈的歡喜と靈的勢力とを支配し得るものはなかつた。保羅は基督と偕に活き新なる人となりたることに由て世界の總ての物に勝ち得て餘力あるに到つた。是は驚くべき信仰の實驗なるも疑ふ可からざる心理的事實であつた。彼はローマ書に於て彼の實驗を大膽に告白した。

『キリストの愛より
我儕を離らせん者は誰ぞや
患難なるか
或は苦みか
迫害か
飢餓か
裸體か
危險か
又劍なるか
之れ我儕終日
汝の爲に死に渡され
屠られんとする
羊の如くせらるゝなりと
錄されたるが如し
然とも
我儕を愛する者により
總て此等のことに
勝ち得て餘あり
そは或は死
或は生命
或は天の使
或は執政
或は有能者

或は今あるもの
或は後あらんもの
或は高き
或は深き
また他の受造物は
我儕を我主
イエスキリストに頼る
神の愛より、
離らすること能はざる者なるを
我は信ず』

と。彼は信仰に由て天下無敵、獨立自由の人となつた。更に驚くべきことは彼が神秘的實驗に由て新なる人となるや彼は基督の體の一部分として基督の爲に苦難に遭ふことを喜び且つ榮となしたることである。彼は『基督と偕に苦む』と言ひ、『基督と偕に十字架に釘られたり』と言ひ、『基督と偕に死せり』と言ひ、『基督と偕に葬られたり』と言ひ、『基督と偕に甦れり』と言ひ、基督の心を以て心となす爲に苦難に遭ふことを感謝した。彼は神のため基督のため敎會のため基督者のために同胞人類のため

苦むことを榮となした。これ彼が基督の十字架上の死の幽玄なる意義を味ひたるが故であつた。現代に於ても十字架の敎の意義に徹底し基督の眞精神を自得するには『基督と偕に苦しむ』神秘なる實驗を積むるにあらざれば不可能のことである。保羅は信仰に由て義とせられ基督の內に活き基督は保羅の內に活き給ふて斯る幽深なる宗敎的實驗に徹底したのであつた。

第十二章　保羅と愛の教訓

詩人ブラウニングは

『神よ爾は愛なり
　我はこの愛の上に
　我が信仰を建設す』

と云ひ、エペソの聖者は、

『愛なきものは
　神を識らず
　神は即ち
　愛なればなり』

と教へ、北歐の文豪トルストイは、

『愛のある所に
　神あり』

と記し、テニソンは

『剛健なる神の子
　永遠不朽の愛よ』

と歌ふた。

聖書の教訓に由れば愛は永遠にして無限なる生命である。基督は愛の化身にして神の聖子である。これ父なる神は愛であるからである。愛は即ち神にして神の在まし給ふ處には愛があり、愛のある處には神が在まし給ふのである。保羅は愛に就て如何なる教訓を與へたのであるか。彼はコリント前書に於て愛に就き左の教訓を與へた。

『智識は人を驕らしむ
　されど愛は德を建るものなり』

と。又彼は、

『爾曹の行ふところ
　皆愛を以て行ふべし』

と云ひ、彼が最も愛したテモテに向つて、

『誡命の主意は愛なり
　即ち潔き心と

善き良心と
偽なき信仰より出づ』

と書き送り、又コロサイ書に於て、

『この諸の事の外に
愛を加へよ
愛は衆德の帶なり』

と教訓した。此等の語に由れば保羅が愛の行ひを重んじたことを識り得らるゝのである。彼は愛を以て倫理生活の根本的精神となしまた宗教的生命の源泉と考へたのである。更に彼の愛に就ての教訓はかの有名なるコリント前書十三章の記事である。

コリント前書十三章は保羅の倫理的教訓と云ふよりも寧ろ美麗なる無韻の詩である。靈妙なる愛の歌である。古往今來斯る美麗なる愛の歌は何處にあるであらうか。斯る靈妙なる詩的散文は何處にあるであらうか。斯る內容の豐富なる愛の教訓は何處にあるであらうか。保羅が徹底したる信仰と深刻なる實驗と充實したる生命と高貴なる人格より天眞に流露したる眞心の聲はこの愛の歌である。

保羅がこの愛の歌は彼が心靈の最も深き處より溢れ出たる生命の泉であつた。彼が愛の教訓を知るに足るこの無韻の詩の中に注意すべき點が種々あるのである。彼は人生に於て最も尊貴なるものを愛なりと信じた。彼はこの章の始に於て愛の欠けたる人生の實に無意義なることを主張して居る。これに三種の區別があつた。其一は言語である。其二は信仰である。其三は慈善である。言語、信仰、慈善これ人生の實である。しかし愛の欠けたる言語は如何に美麗にして巧妙なるも唯だ音響のみにして實際的の感化力がないのである。愛の欠けたる信仰もさうである。如何に博學多識にして熱心なる信仰ありとも愛のなき信仰は價値なきものである。保羅は、

『愛に由て働く處の
信仰のみ益あり』

と言つたが。拔山倒海の信仰があつても聞幽顯微の學識があつても慈母の如き藹々たる心情と愛國者の如き熱烈なる至誠なくして唯だ冷かなる理論に偏する信仰は數ふるに足らぬものである。慈善も亦さうである。慈善は人の心の發現にして神の心の流露でなければならぬ。眞に人を愛するための慈善でなければならぬ。然らずして他の動機よりして總ての所有物を與へ是が爲に身命を拋つが如きことありとも唯だ無益に終るのである。故に彼は言つた。

『假令われ
諸の人の言
および天の使の言を語るとも

もし愛なくば
鳴銅や響く鈸の如し
假令われ
預言するの力あり
又すべての奥義と
諸の學術に達し
又山を移すほどなる
諸の信仰ありと雖も
もし愛なくば
數ふるに足らぬものなり
假令われ
我が總の所有を施し
又焚るるために
わが身を予るとも
もし愛なくば

我に益なし』

と。保羅はかく言語、信仰、慈善に就て分量よりも實質を重んじた、行爲よりも動機を貴んだ。形式よりも精神を見たのである。彼は善行と美德とを以て至誠より發現すべきものと信じた。彼はかく愛の充實を高調したると共に愛の內容に就て左の要素を含蓄せしめた。彼の愛の教訓は淺くして狹き意義に解せず深くして廣き意義に解せられた。

保羅が敎へたる愛の第一要素は『寬容で』ある。永く困苦に耐へ忍ぶことである。胸襟洒然として天空海濶の度量あり神と人とのために堅忍不拔の生活を貫くことである。重荷を負ふて遠きに達する心を意味するのである。第二は『人の益を計ること』である。同胞の善の爲に力を盡し社會公共の利益を增進せしむること之が眞實の愛である。第三は『妬まざること』である。嫉妬は人生の呪である。人に對し善良なる感情を抱くこと人の美點を見て胸中に無限の快感を覺ゆること人に對し常に好意を以て接すること偏見と邪情に制せられざることは人生の淸福を享る基である。第四は『驕傲ならざること』である。謙遜の美は德の花である己の才能、學識、富貴、地位、事業、成功に誇らざることは高貴なる人格の薫である。虛榮の心に支配せられざるとは眞の愛の要素である。第五は『非禮を行はざること』である。禮儀は人情の美を表現するものにして社會の秩序の基礎である。個人、家庭、團体の生活に於て禮儀正しきことは文明の進步と人生の幸福に必要なる要素である。禮儀は修養と伴ひ、禮儀は文雅の

友である。しかし眞の禮儀は形式にあらず精神の態度である。外形の優美と高雅と靜淑と恭謙のみにあらず精神の眞と善と美とである。眞の禮儀は心の發現でなければならぬ。第六は『己の利を求めざること』である。人には利己的の生活に陷り易き性質がある。しかし自我の利益のみを求むる人は人生の意義を解せざる憐むべき人である。人生の眞の幸福は利己的の生活にあらずして利他的の生活である。自我を超越したる献身的生活に眞の意義がある。純潔なる愛心に充實するものは利己的生活を送ることが出來ないのである。第七は『輕々しく怒らざること』である。怒は心の暴風である。怒は人生の破壞者である。怒は心に不快を感ぜしむる根本である。怒は個人、家庭、社會の平和と幸福とを詛ふ惡魔にして主我的精神の亂調である。怒は愛の敵にして暗黑の使者である。愛の一念を以て人に對すれば惡人も善人となり敵も味方となるのである。愛は怒を超越して平和と清福とを齎らすものである。第八は『人の惡を思はざること』である。人の惡を思はざるは君子の心である。人の暗黑なる側面を思ふことは養信にも建德にも得る處が少いものである。人の善を思ふことは神の子の心である。人の光明なる側面を見てその善良なる感化に觸るゝことは人格向上の秘訣である。斯る精神の態度は愛心を以て人に接する時にのみ得らるゝものである。人の惡を思はずして善を思ふ處に神の子の姿は完成せらるゝのである。第九は『不義を喜ばざること』である。正義を喜び不義を喜ばざることは誠實なる生活の根本要素である。不義は人道の敵にして正義は人道の味方である。義は國を高くし不義は民を恥かしむるのである。正義は勝利にして不義は敗北である。不義は滅亡にして正義は生命である。饑る渴く如く正義を慕ふものは福である。神の國の民は正義の民である。眞の義は眞の愛の發露である。第十は『眞理を喜ぶこと』である。虛僞は總ての德の破壞である。眞實なること至誠なることは人格の基礎である。眞理を喜ぶ心は聖者の心である。心の淸きものは福なる天國の民にして神の尊き聖姿を見ることを得るのである。至誠は神に通ずる心にして眞理を喜ぶ心は神の心を喜ぶ心である。第十一は『凡そ事を包むこと』である。此語は總ての事を隱蔽するの意味ではない。總ての事に於て責任を重んじ忍耐し努力することを意味するのである。終始一貫の生活は己が天職に對する献身的愛に由て完うせらるゝものである。第十二は『凡そ事を信ず』るのである。信ずることは勝利と勇氣の本である。總ての事に確信を以て當ることは成功の第一義である。懷疑は虛弱と失敗の母である。一信凝る所鐵石を貫くのである。總ての事業の根底あることはその事業に對する確信があるからである。信じて斷行する時は山を移し海を飜すことが出來るのである。信仰は一種の理想である一種の幻影である。この理想なくしては何等の事業も實現しない。この幻影なくして何等の運動も成功しない。信ずることは爲すことである。爲すことは遂げることである。この强き心は愛の火の燃ゆる處にあるのである。第十三は『凡そ事望む』のである。希望は人の心を活かし失望は人の心を殺すものである。希望は勇氣と奮鬪の原動力にして前進と向上との指導者である。虹の如き希望の彩雲が人の心の輝きつゝある時にその

人は清新にして潑溂たる精神に充實して居るのである。總ての事に於て滿腔の希望に溢れつゝあることは力ある生活の秘密である。自己に對し同胞に對し社會に對し暗黑の側面よりも光明の側面を觀察し、悲觀よりも樂觀をなし、常に希望の明星を仰いで心躍るとは健全なる人生を送る秘訣である。斯る人の生涯は常に光明燦然として輝きつゝある人生の花園である。第十四は『凡そ事を忍ぶ』のである。最後の勝利の冠は堅忍不拔なる戰士の頭に飾らるゝのである。克己と忍耐とは人間幸福の基である。克己なき處には德義なく、忍耐なき處には成功なし。辛抱、我慢、根氣强きこと、終極まで努力することこれが天職を完成する所以である。生存競爭の激甚なる、生の問題の切迫せる現代生活に於て凡そ事忍ぶことは最も必要である。

保羅が實驗し主張したる愛の要素には此等の諸の德を含蓄して居る。即ち彼の愛には君子の清樂がある、聖人の歡喜がある、神の子の盛德が備はつて居る。愛は實に衆德の帶である。眞の愛の露深き處に德の千紫万紅が咲き匂ふて人情の世界を天の樂園となし人生を地上の天國と變化せしむるのである。而してこの德の花は永久に萎ぼまない。愛の心の泉が混々として湧き出で、愛の春風が習々として長閑に吹き渡り、愛の日光が暖かに輝く處には天國の花園がある。この花園は常世の春の庭である。久遠の花の薫である。彼處には神いまし基督いまして永遠不朽の愛の音樂が美妙に奏でられて居る。不老不死の靈藥が潑溂とした愛の活動する處に蓄へられてある。故に保羅は、

『愛は永久に墮ることなし
然と預言は廢り
方言は息み
智識も亦廢らん』

と言つた。預言即ち宗教的教訓は廢る時が有る。方言即ち國語は消え失せる時が有る。智識即ち學問は衰頽する時が有る。しかし人の心の眞實なる愛は永遠不朽である不死不滅である。何となれば神は愛であり基督も亦愛であるからである。愛のある處には神がある基督がある愛は即ち神である基督である。我儕の智識は尊むべきである、しかし我儕の智識は不完全なるものである。舊來の宗教的預言は尊むべきものであるしかし舊來の預言も完全ではない。此等は皆不完全なるを免れない。完全なるものは唯だ愛のみである。愛は總ての事を完うするものである。完全なるものゝ來る時に不完全なるものは廢滅するのである。これ天地の法則である。宇宙の眞理である。小兒の談話、小兒の智識、小兒の思想は大人の談話、大人の智識、大人の思想ではない。大人となる時に小兒のことを捨てねばならぬ。現在の生活は四顧朦朧たるも將來の生活は八面玲瓏となるのである。今は雲霧の彼方に理想の人格を仰ぐが如きも、後には顏と顏と相對して理想の人格と接觸するのである。現在の信仰生活は不完全である。しかし將來に於ては完全に達するのである。現在に於ては神に知られたる基督者も神を完全に知ることは出來な

いのであるが將來に於ては神に知らるゝ如く基督者も亦神を完全に知るに至るのである。故に保羅は、

『我儕の智識全からず
預言も全からず
全き者きたるときは
全からざる者廢るべし
われ童子の時は
語る處童子の如く
識る處童子の如く
慮ふ處童子の如くなりしが
人と成て童子の事を棄たり
われら今鏡をもて見る如く
見るところ昏然なり
然ど彼の時には
面を對せて相見ん
我れ今知ること全からず
然れど彼の時には
我が知らるゝ如く
我知らん』

と言つた。人生に於て信仰の生活は偉大にして意義深遠である。人生に於て希望の生活は光明である勇氣である。勝利である。しかも信仰生活よりも更に偉大なるもの希望の生活よりも更に光明あるものは愛の生活である。神の心の生活である。基督の心の生活である。保羅は言つた、

『それ信仰と
希望と
愛と
三の者は
常にあるなり
このうち
最も大なるものは
愛なり』

と。人生の富貴や名譽や權勢や快樂や智識や共に重んずべきものである。しかし此等は無常迅速なる

ものではないか。落花流水の如きものではないか。雲煙泡沫の如きものではないか。しかも常住不變なる心の富貴、心の榮譽、心の權威、心の歡樂、心の智識は愛である愛は最も大なるものである。使徒ヨハネも保羅と同じく愛の價値を高調して、

『愛する者よ
我儕互に相愛すべし
愛は神より出ればなり
凡そ愛あるものは
神に由て生れ
且つ神を識るなり
愛なき者は
神を識らず
神は即ち愛なればなり
神はその生み給へる獨子を
世に遣はし
我儕をして彼に由て
生命を得しむ
是に於て神の愛
我儕に現はれたり
我儕神を愛するにあらず
神我儕を愛し
我儕の罪のために
其子を遣はし
挽回の祭物(たなへもの)とせり
是即ち愛なり
愛する者よ
斯の如く神我儕を愛し給へば
我儕も亦互に相愛すべし
未だ神を見し者なし
我儕もし互に相愛せは
神我儕の衷に居て

彼を愛する愛を
我儕の衷に完ふす』

と言つた。何人も保羅の如く又ヨハネの如く愛の人となり神の人となり永遠無限に活るものとなるべきである。

第十三章　保羅の倫理觀（一）

保羅の倫理觀は深き興味を以て研究すべき價値がある。彼の倫理觀は希伯來思想の影響を受けたるも更に夫よりも超越したる點がある。また希臘と羅馬の倫理思想よりも保羅の夫は高尚なる要素を含んで居る。保羅は個人と社會の道德が頗る腐敗したる時代に生存した。羅馬人の不道德なる生活の狀態は彼のローマ書の中に詳細に記されてある。希臘人の生活の墮落は彼のコリント書に由て推測することが難くない。特に當時の異敎徒の中には男女の關係が甚だ正しくなかつた。希臘人は哲學と文藝の趣味に富み羅馬人は法律と軍事の天才に秀て居た。しかし彼等の婦人に對する尊敬は餘り高くなかつた。保羅は彼の倫理觀に於て婦人の人格を尊敬した。彼は神の前に於て男女の區別なく婦人の人格の尊嚴を認識し、婦人の價値を高調し、倫理的にまた宗敎的に男女の平等を主張した。彼はガラテヤ書に於て、

『爾曹はみな
キリストを信するに由て
神の子となれり
そは凡そバプテスマを受て

キリストに入る爾曹は
キリストを衣たる者なればなり
かかる者の中には
ユダヤ人
またギリシヤ人
或は奴隷
或は自主
或は男
或は女の分なし
そは爾曹みな
キリストイエスに在て
一なればなり』

と記して居る。保羅の思想に由れば基督者は倫理的又は宗教的に觀察する時は地位、權勢、名譽、智識、財産を超越したるものである。神の前に靈的に觀察する時は基督の心を以て心となす基督者は自主と奴隷の區別なく男性と女性の區別がないのである。神の子としては皆な平等である。兩性は其權利

に於て同一なるが如く義務に於ても同一である。此點に於て婦人を一種の物品の如く看做し、婦人の人格の尊貴を認めず、男子の奴隷の如く待遇したる希臘羅馬の思想と保羅の夫とは非常なる懸隔があつた。保羅は唯に婦人の人格を尊敬したるのみならず彼は男女間の純潔なる生活を高調した、希臘人と羅馬人の生活と信仰の中には姦淫の罪惡なることを深く感ずるの念が乏しかつた。偶像教と神話の中には男女の純潔を破壞する要素が少くなかつた。少數の德行家を除き多數の人民は汚れたる生活に沈んで居た。基督が神の國の人民の資格に於て男女の絶對的純潔を必要條件となし給ひし如く保羅は男女思想の幼稚なりし異邦の人民に對し嚴格なる純潔を主張したのである。彼はコリント前書に記して、

『身体は
淫を行ふためにあらず
主のためなり』（六の十三）
『爾曹の淫を避けよ』（六の十八）
『爾曹の身は
なんぢらが神より受たる
爾曹の衷にある
聖靈の殿にして

爾曹は爾曹のものにあらざることを知らざるか』

と言ひ。また彼はテサロニケ前書に、

『神の旨は
爾曹の潔きこと
即ち姦淫せず
各々己の器を得て
之を潔く貴くして
用ゆることを知る』

と記した。彼はコリント前書に於て、

『爾曹の身は
キリストの肢なることを知らざるか』

と言つて居る。保羅の信仰に由れば基督者の身體は自己の所有ではない神の所有である。基督の所有である。神の子たる基督者の身體は神の聖き靈を宿す神の殿にして基督者は基督の肢である。保羅は基督者の心理的純潔を要求すると共に生理的の純潔を要求した。これ强健なる身體に强健なる精神の宿る如く、純潔なる身體に純潔なる心靈が宿るのである。正しき生活と正しき心と並行する如く清

き身體と清き心靈とは一致せねばならぬ。保羅は基督者の生活は心身共に純潔なることを理想となした。基督者は活ける神の殿である。金銀珠玉を彫めたる寺院及會堂よりいや優りたる神の殿である。活ける基督の活ける肢は基督者である。神の子なる基督者は靈にも肉にも神の聖を代表する者である。保羅は異教徒と基督者との倫理生活に於て斯くも判然たる區別を立てたのである。

更に保羅は一夫一婦の唱道者であつた。希臘人と羅馬人の間には婦人の人格を尊敬せず男女間の純潔を嚴格に要求せざりしために一夫多妻の家族が少くなかつた。貴族と富豪とは多くの奴隷を使役せし如く多くの妾を蓄へて居た。基督が人道の觀念に一大革新を與へて婦人、小兒、奴隷に對する思想を向上せしめ給ひし如く保羅は社會の基礎にして國民の搖籃なる家族の生活を聖化して一夫一婦の大道を高調したのである。彼は結婚を人間の自然の要求なりと信じ、人生に於て結婚は神の命令に基く神聖なる祝筵なりと考へた。彼はコリント前書に、

『人各々その妻をもち
女も各々その夫をもつべし』

と記し。また、

『われ結婚せし者に命ず
妻は夫に別るゝ勿れ』

と言つた。彼は一夫一婦を基督者の結婚の第一義となしたると共に離婚を嚴禁した。彼はある處にて

『男の女に近ざるを
善とす』

と云ひ。基督者にして獨身生活の可能を許して居る。しかし是は特別なる事情の下にある人に對する教訓として解釋すべきである。或は信仰の熱心より獨身生活を送る者もあるであらう。或は家族の犧牲となりて獨身生活を送る者もあるであらう。或は身體の健康のために獨身生活を送る者もあるであらう。保羅は斯る人々の生活の自由を決して妨げなかつた。又この語が絶對に結婚を禁じたるものにあらざることは他の所にて保羅が結婚を是認せしことに由て明瞭である。

保羅は夫婦の關係を神聖なる教會と基督との關係に比較し夫婦の愛情を以て親子よりも兄弟よりも尊重した。彼は夫婦の愛情に就てコロサイ書に左の如く記して居る。

『妻なる者よ
その夫に從ふべし
こは主にある者の
爲すべきことなり
夫なる者よ
その妻を愛すべし
苦をもて
之を待ふなかれ』

彼は貞淑にして柔順なる妻の美德を奬勵し、愛と同情とに富める夫の美德を教訓した。彼は又エペソ書に、

『妻なる者よ
主に從ふ如く
己の夫に從ふべし
そはキリスト
教會の首なる如く
夫は妻の首なればなり
キリストは
身の救主なり
然ば教會の
キリストに從ふ如く

妻も凡のこと
夫に從ふべし
夫なる者よ、
キリストの敎會を愛し
その爲に己を捨て給ひし如く
爾曹も妻を愛すべし
妻を愛するは
己を愛するなり
己の身を惡む者は
曾てあることなし
之を守り養ふこと
キリストの敎會を
守り養ふが如し
我儕は彼が身の肢なり
彼が肉より出て

彼が骨より出てたり
是故に人は
父と母とを離れ
その妻に配ひ
二のもの一体になるべし
この奥義は大なり
我が言ふ處は
キリスト敎會を指なり
爾曹も各その妻を
己の身となして愛すべし
妻もその夫を敬ふべし』

保羅の見解に由れば基督者の夫婦の關係は實に高尚にして純潔なるものである。神聖にして美麗なるものである。妻が夫に對する献身的生活は基督に對するそれの如くなければならぬ。妻が夫を敬愛することは敎會が基督を敬愛するが如くなければならぬ。是れ基督が救主として人を愛し給ふ如く夫は妻を愛するからである。これ純潔なる愛を基礎とする献身的の妻の道ではないか。是に對し夫が妻を愛す

ることも献身的でなければならぬ犧牲的でなければならぬ。基督が己を捨てゝ教會を愛し給ひし如く夫は己を捨てゝ妻を愛せねばならぬ。基督者の妻に對する愛は無我の愛である。己を捨て己を殺して妻を愛する眞心である。眞實に妻を愛することは己を愛することである。誰か己を愛せざる者があらうか。基督が教會を守り養ひ給ふ如く夫は妻を養ひ守るべきである。基督者は基督の肢なるが如く妻は夫の肢である。夫婦の關係は二人一體である。神秘なる融和である。愛情と愛情との一致である。赤心と赤心との調和である。靈魂と靈魂の同化である。故に夫の肉は妻の肉である。妻の血は夫の血である。夫の笑は妻の笑である。妻の涙は夫の涙である。思想の共鳴となり感情の共鳴となり意志の共鳴となり信仰と趣味との共鳴となることこれ夫婦の音樂的生活である。美妙なる琴瑟調和の生活である。人生の清福は此處にあり家庭の天國は此處にあるのである。

保羅がかく妻の愛情と義務とを要求せしと共に夫の愛情と義務とを要求したることは注意すべきである。彼はかく夫婦の道を神聖に高貴に美麗に嚴肅に觀察したるが。彼は更に教訓を與へた。

『もし兄弟
不信なる妻をもてるとき
妻と偕に居らんことを願はゞ
之を去る勿れ

また女
不信なる夫を有るとき
夫と偕に居らんことを願ば
之を去る勿れ

そは不信なる夫は
妻に由て潔くなり
不信なる妻は
夫に由て潔くなればなり』

彼はもし夫婦の間に於て信仰の調和と愛情の一致とが献身的にまた犧牲的に實現せられざる時は忍耐と希望と確信の必要なることを教へた。基督を中心となす妻は不信なる夫を感化する爲に忍びて祈り忍びて愛し忍びて敬ふべきである。不信なる妻に對する夫もまた然りである。忍耐と熱心と愛と祈とを以てなす時に神は必ず彼等の希望を成就せしめ給ふのである。理想的の夫婦は祈禱の產物である。夫婦の道の完成は忍耐の美德の實である。保羅はまた言つて居る。

『夫活る間は
妻法に繫がるゝなり

然ど夫もし死なば
心のまゝに
嫁入することを許さる
惟主にある者のみに往くべし
されど我思ふに
女其まゝに止りなば
殊に福なり』

と。保羅は再婚を禁じなかつた。是は其人の自由に任せたのである。しかし彼は再婚する時に基督者を選ぶことを勧告した。彼はまた再婚せず貞操を守ることは更に福なりと信じて居た。是は妻の節操を要求すると共に夫の節操をも要求したるものと見るべきは論理の歸結である。人格の永存と意識の永續とを信じたる保羅は夫婦の間に於て死後の節操を重んじた。基督者の夫婦は永遠の愛の結合にしてまた完成でなければならぬ。

第十四章　保羅の倫理觀（二）

保羅は希臘と羅馬との思想風俗に超越して婦人の人格を尊重し、男女の純潔なる生活を高調し家庭の和樂の基礎なる一夫一婦と夫婦の献身的なる愛情と犧牲的なる奉仕に就て教訓を與へたると共に親子の道に就て高尚なる思想を鼓吹した。彼はコロサイ書に、

『子たる者よ
爾曹すべてのこと
兩親に從ふべし
これ主の喜び給ふ所なり
父なる者よ
爾曹の子を
怒らする勿れ
恐くは其氣餒ん』

と記し。またエペソ書に於て、

『子なる者よ

爾曹主に在て
兩親に從ふべし
これ合宜なればなり
爾の父母を敬ふべし
約束を加へたる誡は
之を首とす
之れ爾が福をえ
又地上に壽長からんためなり
父なる者よ
爾曹の子を
怒らするなかれ
主の警誡と教訓を以て
養育すべし』

と言つて居る。由來保羅と同じ血統を遺傳するユダヤ人は家族制度を重んずる民族であつた。舊約時代よりユダヤ人は親子の關係を重んじた。彼等の思想に由れば一家は小さき會堂の如きものであつた。

家庭は聖き神の祭壇であつた。家長は一家の祭司にして家族は信者の如きものであつた。昔のユダヤ人は近世の英國に於ける清教徒の如く家庭を禮拜堂となし、親は牧師にして家族は信者の如く、父母の教育の理想は家族を聖徒となすことであつた。故にユダヤの律法の基礎なる十誡の中の第五誡に、

『汝の父と母とを敬へ
汝の神エホバの
汝に賜ひたる地の上に於て
汝の生命を長からしめんがためなり』

と記され。申命記には、

『汝心を盡し
精神を盡し
力を盡して
汝の神エホバを愛すべし
今日我が汝に命ずる
此等の言は
汝之を其の心にあらしめ

勤めて汝の子等に敎へ
家に座する時も
路を歩む時も
寢る時も
起る時も
之を語るべし』

と記し。子の義務と親の義務とに就て敎へた。保羅はこの舊約の律法の精神に基き親に對する孝道を尊重した彼の孝道は單純に親子の關係より生ずるのみならず神を基礎となす孝道であつた。全心全靈を献げ神を愛し神の喜びに入ることは基督者の義務であるが、保羅が親に對する孝道は親を愛し親を喜ばすと共に神を愛し神を喜ばすことであつた。換言すれば親に仕ふることは神に仕ふることゝ同じ意義であつた。保羅の孝道には深き宗敎的信念の基礎があつた。彼は、

『汝すべてのこと
兩親に從ふべし』

と敎へたると共に、

『汝等主に在て

兩親に從ふべし』

と警告し、子たる者は主基督と偕に在り即ち基督の精神を體得して兩親に仕ふることを高調した。かつ彼は柔順の美德を敎へて居る。子が親に柔順なることは孝道の要素である。是は基督の心を以て親に柔順なることである。彼は親に柔順なることを正しきことゝ信じ、

『これ合宜(だしきこと)なればなり』

と言つて居る。孝道は正道である。孝道には柔順と共に尊敬の要素を含蓄して居る。彼は、

『爾の父母を
敬ふべし』

と言つた。眞の尊敬の念のある處に眞の柔順の心があるのである。

父母に對する尊敬と柔順とは保羅の孝道の要素である。彼は斯く父母を尊敬する者は人生の幸福を完うし延命長壽の祝福を受ることを信じて居た。基督敎の思想に由れば親は神に代つて兒童を愛し敎へ導くものである。神の代理として兒童を養育するものは父母である。父母は第二の神である第二の救主である。兒童が物質的に精神的にまた智識的に道德的に父母より享る恩惠は實に高大にして無限である。山よりも高く海よりも深き父母の恩に對して感恩の情に滿され、父母を敬ひ、父母に從ひ、父母に仕ふることは基督者の道である。天に在す父の愛は地にある親の愛を通して現はるゝのである。

親の愛は神の愛の發現の一である。故に親を愛することは神を愛する愛の一である。親を愛せず親に仕へずして神を愛し神に仕ふることは不可能である。保羅は斯く子たる者の道を意義深く信じたると共に子に對する親の道に就て教訓した。

彼は父母が慈愛と柔和とを以て兒童を教育すべきことを警告して居る。而して父母の子に對する慈愛と柔和の教育は宗教的信念の基礎に立たねばならなかつた。彼は、

『主の警誡と教訓を以て
養育すべし』

と記して居る。親の子に對する義務は基督の教を基礎として養育することである。何となれば父母は神の代理として兒童を教育する者であるからである。基督教の思想によれば兒童は神の賜物である。我子にして我子ではない。神の子を預りて養育して居るのである。故に父母は氣儘に兒童を教育することは出來ないのである。親の意見にあらず基督の誡と教とを以て教育せねばならぬ。兒童をして神の意に適ふ活ける供物とならしめねばならぬ。茲に父母の嚴肅なる責任がある。畏るべきほどに高貴なる義務がある。保羅は基督者たる父母が兒童に對する責任を以て母の如く教師の如くまた牧師の如きものなりと信じた。父母の言行を通して基督の心を兒童の心に現さねばならぬ。自ら神の子たる模範となりて兒童を神の子として教育せしめねばならぬ。茲に親の道に深き意義と親となれる生活に高き價値がある。換言すれば兒童をして此世の親の愛に由て天の親の愛を知らしめ人なる親の心に由て神なる親の心を自覺せしめねばならぬ。かつ兒童は神の子供である。故に親は兒童を愛するのみならず敬はねばならぬ、教ふるのみならず尊まねばならぬ、養ふのみならず高きに導かねばならぬ。敬虔の念を以て兒童に接せねばならぬのである。

保羅は主人と僕の關係に就て如何に教訓したのであるか。彼はエペソ書に於て、

『僕なる者よ
キリストに從ふ如く
畏れ戰慄き
誠の心をもて
肉體に就ける
主人に從ふべし
人を悅ばす者の如く
惟眼前の事を
務むること勿れ
キリストの僕の如く

心より神の旨を行ふべし
人に事るが如くせず
主に事るが如く
心好くすべし
そは僕たる者にもあれ
自主なる者にもあれ
各行ふ所の善に由り
報を受んことを
爾曹知ればなり
主人なる者よ
爾曹も又此の如く
彼等に行ひて
厲言を止めよ
そは彼等と汝等の主
天にあり

彼は偏る處なしと
汝等知ればなり』
又彼はコロサイ書に記して、
僕なる者よ
凡のこと肉体にある
主人に從ふべし
人を悅ばす者の如く
ただ眼前の事を務むることなく
誠の心を以て
神を畏れて從へ
爾曹何事も
人に事ふる如くせず
主に事ふる如く
心より之を行ふべし
主人なる者よ

爾曹もまた
天に主あるを知れば
義に從ひ
公平を以て
その僕を待ふべし』

と言つた。保羅が夫婦の道と親子の道を正しうするために宗教的信念を基礎となしたる如く主人と僕の關係に於ても神と基督を根本思想となしたることは注意すべきである。彼の生存したる時代は人道の思想幼稚にして奴隷の使役盛に行はれ同胞人類にして宛も禽獸の如く待遇せられたる者があつた。彼等の人格の價値は無視せられて居た。斯る時代に於て保羅は根本的に奴隷制度を破壞せんとは試みなかつたが奴隷に對する待遇の思想に大なる變化を與へた。彼は人の僕たるものが習慣と形式に盲從し止むを得ずその職務を執ることを憂へ勞働の根本精神を敎へた。彼は僕の主人に仕ふる精神は基督者が基督に仕ふる如く誠心誠意を以て自ら進み自ら喜んでその義務を忠實に盡すべきこと即ち人を對手とせず神を對手となし人の前のみならず神の前に於て勤勞することは僕の義務である。又僕は基督の僕の如く主人に對し表裏内外の區別なく心より神の旨を行ひ器械的に止むを得ずしてなすにあらず自發的になすべきである。僕は主人に對し他動的にあらず自動的に働くべきである。監督者の有無に

關せず、報酬の多少に係らず、己が責任を忠實に盡すことは勤勞の本義である。人に仕ふるが如くせず神と基督に仕ふるが如く心より爲すことは僕の道であることを敎へた。保羅は自由の人たると奴隷たるとまた主人たると僕たるとの區別なく基督者の勞働は天に對してなす勞働なりと信じて居た。これ公明正大なる精神の活動である。これ自己の天職を誠實に盡す者の生活である。これ義務を忠實に果す者の歡喜である。これ良心の滿足の爲め勤勞する者の動作である。これ保羅の云へる如く、

『人を悅ばす者の如く
ただ眼前のことを
務むることなく
誠の心を以て
神を畏れて從ふ』

生活である。又、

『何事も人に事ふる如くせず
主に仕ふる如く
心より之を行ふ』

生活である。

保羅は斯く高尚なる思想を以て僕の義務を聖化したる如く彼は主人の義務に就て信仰的解釋を與へた。彼は靈的に觀察する時は主人も僕も神の子としての人格と價値とを有すべきものである。神は天の父にして人は神の子供である。主人も僕も神の前に於ては同胞兄弟である。故に主人は僕に對し公平と柔和と深切とを以て待遇せねばならぬ。神の公平にして無私なるが如く主人は公平にして無私でなければならぬ。主人は僕を同胞の一人また神の家庭に於ける家族の一人として義と公平とを以て待遇すべきである。主人は僕の人格を尊み彼を神の子の一人として交際し指導せねばならぬと敎へた。

第十五章　保羅と國家的觀念

古來猶太人は愛國的民族であつた。彼等の歷史に光彩を放つ幾多の愛國者と預言者とは宗敎的信念を基礎となす愛國的の熱情に燃されたる志士仁人であつた。保羅は『ヘブル人より出たるヘブル人』として預言者の如き謹嚴にして高尚なる性格と倶に愛國者の如き勇敢にして熱烈なる精神を兼備して居た。彼は『異邦人の使徒』たる基督の召命を自覺し希臘人と羅馬人との間に盛んなる傳道的活動をなし彼の眼中には常に萬國と萬民の光景とが歷々として映じて居た。故に羅馬全帝國は彼の敎區にして羅馬の全領土に住居する各種の民族は彼が牧ふべき羊の群であつた。保羅は斯く雄大なる世界的計畫をなし人類的の思想を抱きたるも同時に彼は多感熱情なる懷鄕愛國の熱誠家にして同胞民族を愛するの念甚だ切實であつた。彼は曾て『律法に由ればパリサイの人熱心に由れば敎會を責むるもの』なりしがダマスコの途上に於て新生活に入りしより後は一般のパリサイ人の如く偏狹にして頑迷なる保守排外の愛國者ではなかつた。彼は實に世界的にして人道的なる愛國者であつた。彼は異邦人に向て福音を宣傳せざれば禍なりと語りたるも是と共に彼はローマ書に於て言つた、

『兄弟よ我心に願ふ處と神に祈る處は
　イスラエルの救はんことなり』

と。彼は同胞民族の救はれんために日夜努力し熱禱した。又彼は、

『もし我が兄弟我が骨肉の爲ならんには
　我はキリストより離れ
　沈淪に至らんも亦我願なり』

と絶叫した。保羅は骨の骨、肉の肉なる同胞民族の救はるゝ爲には彼自ら滅ぶるとありとも遺憾なしとの懷郷愛國の絶頂に達して居た。彼は同胞の爲には忘我の境に逍遙して居た。彼自ら犧牲となり同胞を聖め高むる熱心に燃えて居た。斯る預言者の信念と愛國者の熱誠とに溢れたる保羅は國家に對し如何なる觀念を有したのであつたか。

保羅は慨世愛國の志士なりしも一般の猶太の愛國者とは思想に於て異る處があつた。當時の猶太人は羅馬政府を以て壓制と殘虐と不義の代表者となし羅馬政府を破壞することは猶太人の熱望であつた。しかし保羅は羅馬人の腐敗と墮落に就て記したることあるも羅馬政府に對し批評的態度に立たなかつた。又羅馬帝國の衰亡を謳歌するが如きことはなかつた。彼は內外人の區別なく宗教的に救濟せんと努めたるが故に猶太國の政治又は羅馬帝國の政治問題を評論し其是非善惡を批判して直接に政治的改革を唱道するが如きことはなかつたのである。彼は善良なる政治の基礎と健全なる國家の要素とを個人の改善進歩に求めた。國民各自の精神をして誠實ならしめ理想をして高遠ならしめ人格をして善良ならしむることは總ての政治的改革の根本にして總ての愛國的事業の急務なることを知つて居た。而して彼は國家に對し如何なる觀念を有したのであるか。

保羅は敢て政治を專門に論じたのではなかつた。彼は又政體の組織の善惡に就て敎へたのでもなかつた。彼は極めて總括的の意義に於て種々なる政體と種々なる國家を超越して彼が國家に對する思想を實際的に敎訓したのである。彼は如何なる國家に關せず其國家を指道する主權者の權威に對し人民の柔順なる義務に就て敎訓した。彼は、

『上に在て權を掌る者に
　凡て人々從ふべし』

と言つた。彼は國家の支配者の權威には何故に柔順なるべきかを勸告したのであるか。是れ彼は國家の支配者の權威の本源を神に歸し主權者の權威は神に由て立てられたるものなりと信じて居たからである。故に彼は、

『そは神より出ざる權なく
　凡そ有るところの權は
　神の立て給ふ處なればなり』

と言つて居る。彼は斯く主權者の權威を神の立て給ひたるものなりと信じたるが故に是に背く者は神

の規定に背く者なりと考へた。彼は、

『是故に權に悖ふ者は神の定に
逆くなり』

と言つた。次に人民の支配者に對する義務は唯だ善を行ふことであつた。人民にして主權者を恐怖するは自ら惡を行ふが爲である、善を行ふ者は國家の權威に對し何等の恐怖がないのである。人民の善行は主權者是を嘉賞し人民の惡行は是を責罰するのである。故に保羅は言つた。

『有司は善行の畏にあらず
惡行の畏なり
爾權を畏れざることを欲ふか
唯善を行へ
然ば彼より褒を得ん』

と。保羅は斯く治者に對する被治者の柔順と善良とを要求すると共に被治者に對する治者の責任と義務に就て敎訓した。保羅は國家の支配者を以て人民の善の爲に政治を行ふものとなし國家の支配者は神の役者なりと信じた。彼は國家の支配者は絶對の善にして愛の本源なる神の使者である神の役者である神の心を心となし國家を支配し人民を指導すべき天の父の代表者であると考へて居た。彼は國家の支配者は神に奉仕する者にして神に奉仕する爲に人民に奉仕する者である神を愛すると共に人を愛する者である天來の使命を自覺し天意を以て人民を敎化する者であると信じた。換言すれば主權者は人民の善の爲に政治を行ふ者である。斯る神の役者たる國家の支配者に對し人民の義務は唯だ善を行ふことであつた。惡は治者是を罰し善は治者是を賞すしかも被治者が惡を去り善を行ふは法律の制裁を恐るゝが故にあらず良心の滿足と平和のために賞罰の觀念を超越して唯だ誠心誠意を以て從ふべきである。故に保羅は警告した。

『彼は爾に益せん爲の神の僕なり
もし惡を行はば恐れよ
彼は徒らに刄を採らず
神の僕たれば
惡を行ふ者に怒を以て報ゆる者なり
故に之に從へ
惟怒に緣てのみ服はず
良心に由て服ふべし』

。保羅は治者と被治者、主權者と人民との關係は神に對する信仰を基礎とするものとなし神の心を以

て心となす主權者に從ふことは神に從ふことと同意にして善を以て被治者に臨む治者に從ふことは神の善に從ふことと同意義であるとした。

保羅は更に國家の支配者に對する人民の納稅の義務に就て敎へた。前にも述し如く治者は神の役者である。彼は神の代表者にして神意を以て人民を指導する者である。故に此の神の役者に對し租稅を納むることは人民の義務である。故に保羅は、

『是故に爾曹貢を納めよ
彼等は神の用人にして
常に其ことを司とれり
爾曹受べき所の人には之を與へよ
貢を受べき者に貢し
稅を受べき者に稅し
畏るべき者は之を畏れ
敬ふべき者は之を敬へ』

と言つた。此の保羅の思想は基督の語り給ひし、

『カイザルの物はカイザルに歸し
神の物は神に歸すべし』

との敎訓と意義相通じたる處あるが如く想はるゝのである。保羅が國家に對する觀念は是を要するに次の如くであつた。

人民は國家の法律に從ひ國家をして生存の目的を達せしむる爲に租稅を納むべきである。何となれば國家は社會と民衆の秩序と幸福とを增進せしむる神の器であるからである。而して神の意志は國家の意志の源にして神の法律は國家の法律の基である。又國家の主權者は神に奉仕する者にして人民は軈の心に從て善を行ふべき神の民である。

第十六章　保羅と永遠の希望

古今東西に於ける幾多の宗教家中にて使徒保羅の如く現實生活の價値を高調した者は稀であらう。彼は信仰の旅路に於て苦難の日を數へ悲哀の年を過ごしたるも基督の苦難に與かり神と人との爲に涙滋き生活を繼續することを以て基督者の光榮となした。彼は信仰生活に熱中し靈界に對する憧憬强烈なりしも現實生活を尊重し現世に對する趣味深甚であつた。彼はコリント後書に於て、

『我等四方より難みを受れども窮せず
詮かた盡れども望を失はず
責らるれども棄られず
倒るれども亡びず
我等何處に往にも
常にイエスの死を身に負へり
此はイエスの活ることを
我等の身に顯はれしむるなり』

と記せる如く現世の苦痛の中に感謝と彰榮の生活とを送ることは基督の力を表現する榮光なりと信じて居た。彼は基督の福音は信ずる者を救ふ神の力なりと證したると共に愛に由て働く所の信仰のみ益ありと敎へ信仰と實行との調和を力說した。彼は又耶蘇基督にありては割禮を受るも受けざるも益なく唯新に作られし者のみ益ありと言ひ形式よりも生命の必要を高調した。斯く現在の生活の價値を認識したる保羅は同じく未來の生活の價値を尊重した。彼はコリント後書に於て、

『そは我等見る處に由らず
信仰に由て歩めばなり
我等の心强し
最も願ふ處は
身を離れて主と偕に居らん事なり』

と記し又ピリピ書に於て、

『又我が願は世を逝て
キリストと偕にあらんことなり
これ最も善き事なり』

と告白した。保羅は現世を尊重するが故に未來を輕視せず未來を尊重するが故に現世を輕視するが如きことはなかつた。彼に於ては現世に活るは未來に活る所以にして未來に活るは現世に活る所以であ

つた。然らば保羅が未來に對する信念と永遠の希望とは如何なる意義を含蓄して居たので有るか。基督教が未だ世界に宣傳せられざる前に於て人間最後の運命が幽暗なる墳墓にあらざることを信じたる民族は少くなかつた。人間の生活する處には死の事實がある。世界到る處に墳墓の影がある。寺院と墳墓とは人類共通の所有である。禮拜と信仰とは世界普遍の事實である。唯其信念、其思想、其生活の內容に於て文野淺深の區別があるのである。かの現實的にして政治的なる羅馬人の中にも英雄偉人の靈の不滅に對する信念があつた。かの哲學的にして藝術的なる希臘人の中にも他界に對する觀念と靈の不朽に對する信仰は存在した。我國に於ても祖先の靈が永存して國と家とを守護するとの思想があつた。未來の生活と永遠の希望とは人心最奧の要求である。唯是に關する信仰と思想とが民族と文明の程度に由て其趣を異にするのである。

保羅は猶太人中の猶太人であつたが、彼は一般の猶太人より異りたる死と未來に對する信念とを抱いて居た。古來猶太人は未來の存在を朦朧と信じて居た。彼等は人間の最後の運命が墳墓にあらざることを知つて居た。しかし彼等は死を以て人生最大の悲痛不幸不運と想うて居た。彼等の信仰に由れば死は幽暗なる冥土に赴くことであつた。死は人生の快樂と幸福とを奪ひ去るものであつた。而して未來の生活を無爲と靜寂の狀態の如く信じて居た。故に希伯來の文學には陰府、冥土、死の蔭の谷と言ふが如き詞が少くないのである。保羅は斯る民族的信念の中に生長したるも彼は基督者となりたる爲に斯る猶太的信念より超越して居た。保羅の思想及信仰に由れば死は暗黑の夜にあらずして光明の曙であつた。死は滅亡の先驅者にあらずして生命の指導者であつた。死は退化の終極にあらずして進化の階段であつた。保羅の未來は現世よりも更に優越したる靈界の新天新地であつた。現世の生活に於て完成せられざる人格が未來の生活に於て完成せらるゝことは保羅が永遠の希望であつた。且つ保羅の確信に由れば基督者の死は人生の戰に奮鬪したる信仰の勇士が勝利の進行曲を歌ひつゝ天の聖門に凱旋することであつた。故に彼はコリント後書に於て、

『我等之を知る我等が地にある幕屋
もし破れなば神の賜ふ處の家天に在り
手にて造られざる窮りなく保つ處の家なり』

と記しテモテ後書に於て、

『我既に信仰の善き戰を鬪ひ
既に馳すべき路程を盡し
既に信仰の道を守れり
今日より後
義の冕我が爲に備へあり』

と告白した。保羅の信仰に於て死は人生の悲劇なりしも決して恐怖すべきものにあらず又忌避すべきものでなかつた。何となれば死は更に充實したる永遠の生命に入る門であるからである。又彼は基督者が信仰に由て死の力に勝つことを證した。彼はコリント前書に於て、

『最後に亡さるゝ敵は死なり』

と云ひ。又、

『死よ爾の刺は何處にありや
陰府よ爾の勝は何處にありや
我等をして我主イエスキリストに由て
勝を得しむる神に謝す』

と證明し基督者は死に勝つことを得ると訓誡した。基督者は現世に於ける惡の勢力に勝つのみならず智識も富貴も權勢も名譽も勝つと能はざる死に勝つ者である。基督に於ける信仰は死亡を生命となし、陰府を天國となし、暗夜を白晝となすのである。之基督者の心が基督の生命と一致して居るからである。保羅は未來の存在及永遠の希望を基督の復活と深き關係あるものと信じて居た。彼はコリント前書に次の如く記して居る。

『キリストは死より甦りしと宣傳るに
汝等の中死より甦ることなしと
言ふ者あるは何ぞや
もし死より甦ることなくば
キリストも亦甦らざりしならん、
キリストもし甦らざりしならば
我等の宣る處空しく
又汝等の信仰も空しからん
且我等神の爲に僞の證をなす者とならん
我等神はキリストを甦らせしと證すればなり
もし死せし者甦ることなくば
神キリストを甦らしむることなかるべし
もし死せし者甦ることなくば
キリストも甦ることなかりしならん
もしキリスト甦らざりしならば

汝等の信仰は徒然汝等は尚罪に居らん
又キリストに在て眠りたる者も亡しならん
もしキリストに由れる我等の望
此世のみならば
衆の人の中に於て尤も憐れむべき者なり
されど今キリスト死より甦り
眠りたる者の復生の首となれり』

と。保羅は永遠の希望と基督の復活とを聯結せしめ基督の復活に由て基督の永遠の生命を確證した。未來の生活即永遠の希望は基督者の死活問題であつた。もし永遠の生命なくば基督者の信仰は無價値である。福音も救も未來の存在なくば徒爾である。傳道も神の國も永遠の希望なくば虚僞である。保羅は基督の復活の事實を以て基督者の復活の確證となし基督の復活は永遠の生命と無限の進化の希望であつた。彼の信仰に由れば基督者は人生に於て如何に哀愁、寂寞、悲慘、孤獨、苦痛の生活を送るとも眞に基督の生命と一致する時に永遠に基督と偕に活るのであつた。而して保羅が基督者の復活に就ての觀念は信者各自の肉体が復活すると云ふに非ず又地中の墳墓より基督者が復活すると云に非ずして基督者の人格が死滅の世界より永生の世界に入り、暗黑の天地より光明の天地に移るとであつた。換言すれば靈的に天の榮光に沐浴するとであつた。人格の無限の進化と靈的生命の永遠の充實を意味して居た。保羅が永遠の希望の中に含蓄せしめたる他の要素は終極の審判に對する信仰である。彼はローマ書中に、

『我等は皆キリストの
臺前に立つべきものなり』

と斷言し。コリンタ後書中に、

『そは我等必ず皆なキリストの臺前に出て
善にもあれ惡にもあれ
各々身に居て爲し所の事に循ひ
其報を受べきものなればなり』

と警告し。又ローマ書中に、

『神は人の行ひに從て
各々に其報をなすべし
耐忍と善を行ひ
榮光と尊貴と不朽のものとを求る者は
永生を以て報ん

されど爭をなし眞理に從はず
不義につく者は
報ゆるに憤と怒と艱難辛苦とを以てす
こはユダヤ人を始めギリシヤ人
凡て惡を行ふ者に及ぶなり
ユダヤ人を始めギリシヤ人
すべて善を行ふ人には
榮光と尊と平安とを以て報ゆべし』

と證した。保羅は基督者の生活の實に價値あり意義あることを高調した。人の一言一行は永遠の責任を含蓄して居るのである。過去は現在に現在は將來に人の思想も行爲も信仰も人格も永遠無限に繼續するものである。人は今日一日の生活を爲すと共に幾千歳の後に於て生活して居るのである。人は無常迅速にして落花流水の如き果敢なき此世に生存すると共に永遠無限の不變不動なる天地に生存しつゝあゝのである。基督者は差別觀よりすれば生の歡喜あり死の悲哀ある世界に住むものである。しかし平等觀よりすれば生死を超越して居るものである。基督者の生活に於て死は瞬間の變化である。物質的には死あるが如きも靈的には死はないのである。基督の救に入りし者の恩惠の生活は生命の生活である。基督者は常世の生命の天地に生存する者である。白髮の老翁たると紅顏の少年たるとを問はず精神的に永遠の青年である。不老不死の信仰的勇士である。基督者の生活は鬱々蒼々たる常磐木の生活である、不斷の生長、不斷の繁茂、不斷の生命に充實する生活である。基督者は人爵よりも天爵の尊貴なることを知るものである。人の毀譽褒貶以上に神の公明正大なる審判に信賴する者である。神の賞罰の前に立つものである。しかし基督者は永遠の希望と未來の善報とを得んが爲に善を爲すものではない。神を愛するが爲に善をなし善を爲すが爲に永遠の希望と未來の善報を受るのである。基督は常住不變の愛である此愛と偕に活る者は常住不變の存在者である。基督は永遠不朽の生命である此生命と偕に活る者は永遠不朽の存在者である。使徒保羅の永遠の希望には幾多の意義深遠なる靈的眞理が含蓄せられて居るのである。

第十七章　保羅の人格

使徒保羅は原始的基督敎の歷史に於ける偉大なる人格なりしのみならず世界の宗敎歷史に於て特筆すべき非凡なる靈的天才であつた。彼の靈趣溢るゝ傳記は信仰生活の向上史であつた。彼の感興に滿つる事業は基督敎が世界を敎化したる傳道史であつた。彼が畢生の汗血を絞つて記述したる幾多の書翰は彼が基督の知遇に感激し同胞の聖化に熱中したる靈的實驗の告白錄であつた。彼の血あり涙ある一言一行は人類の倫理的及宗敎的生活の模範にして靈的趣味が橫溢して居る。彼の崇高にして雄大なる献身的傳道の効果は世界歷史の新なる時期を作興した。彼は希臘羅馬の古典的文明に洗禮を授け中世及近世に於ける基督敎文明の原動力となつた。斯る顯著なる感化を人類進歩の歷史に與へたる保羅は如何なる人物であつたか。

春花秋月幾千歲、古今東西の歷史に嶄然頭角を現はしたる偉人には多角的に發達したる性格を備へ卓越したる特徵を發揮する者が多かつた。保羅も他の偉人と同じく多方面に優越したる特徵を有する傑士であつた。

第一　學者としての保羅

保羅は基督敎の世界的傳道者として献身せざりし前に於て嚴格なる猶太敎の學者であつた。彼は猶太の本國に於て生れず希伯來思想と希臘趣味と接觸し東西にある諸民族の交通往來する要路に於て生れた。彼はアレキサンドリヤ、アゼンスと共に學術の進歩の顯著なるキリキヤのタルソに成長した。彼は青年時代にエルサレムに留學しガマリエルの高弟となつた。彼は博學多識なる當代の學者として尊敬すべき人物であつた。彼は異鄕に住居したるが故に異邦の文學及思想に接觸する機會があつた。彼の學者としての修養は希臘と羅馬の古典に通ずるために其の哲學及文藝を專攻したのではなかつた。彼は異敎的文學の智識を多少有したるも彼が獨特の長處は希伯來民族の精華として猶太の律法に通じ其主義に熱心なる愛國的宗敎家たることであつた。彼は斯く猶太的學者として基督の召命に接せざる前に於て彼の道德的生活の向上と靈的の平和と人格の修養に熱中し是が滿足なる解決を猶太の律法に求めた。彼は舊約聖書に通曉し民族精神の神髓を吸收し建國以來祖國の歷史を飾る律法、預言、聖文學の精神に徹底して居た。

保羅は希臘と羅馬の文明の感化に接し易き境遇に成長したるも其の深大なる影響を受けずして猶太敎の學者たりしことは彼の書翰に由て明白である。彼は驚くべき宗敎的實驗に逢ひて新生活に入り又新なる信仰生活を證明するに當り猶太の歷史、文學、道德、宗敎を以てしたることに由るも彼が猶太的の學者なりしことを知るに難からざる理由がある。彼が基督者となりて潑溂たる信仰と權威ある敎訓と深刻なる感化とを與へ彼が宣傳したる福音に神秘なる勢力ありしことは彼が信仰の熱烈なると彼が

人格の高貴なると共に彼が博學多識なりしことは其原因の一であつた。十二使徒の中にてヨハネは幽深なる思想家なりしも該博なる學者ではなかつた。彼は直覺的の宗教家なりしも論理的なる教師ではなかつた。彼は幽玄なる神秘家なりしも明晰なる哲學者ではなかつた。しかし保羅は彼の書翰に於て彼自身を表現するが如く彼が智識の豊富、彼が論理の精確、彼が直覺の鋭敏、彼が神秘の充實は、彼が生涯の特徴であつた。彼は眞實に猶太的の學者であつた。しかし彼は是を基督の靈化に由て新生活と新信仰のために用ひた。

第二　保羅は自由なる思想家であつた

保羅は斯く古來の律法を研究し猶太教の教理を解釋し其預言、歴史、文學に通曉したると共に深遠にして獨創的なる自由思想家であつた。彼は猶太の學者なるに係はらず偏狹、保守、頑迷、排外に陷らなかつた。彼は天來の靈光の下に自己内心の直覺と實驗とに由て古來の傳說及律法を活用し宗教的眞理に徹底する爲に日進月歩の努力をなした。彼の思想は自由なりしも堅實であつた。彼の幻影は鮮明にして鋭敏であつた。彼は徹底的の思想を尊重して微溫的の智識に滿足することが出來なかつた且つ彼は思想家として空理に馳せ思辨に耽るが如きことはなかつた。彼の宗教的智識は單に彼の智的思索の產物にあらずして靈的實驗を基礎として居た。彼の論理は氷の如く冷かではなかつた愛情の熱に由て燃されたるものであつた。彼の思想は枯木死灰の如く無味乾燥なるものにあらず血と涙とに潤ほひ靈活自由にして趣味津々たる獨創的の權威があつた。

第三　保羅は雄大なる事業家であつた

保羅は希臘趣味に接觸し易き境遇にありし猶太人として又羅馬の政治的支配と特權とに密接の關係ある羅馬の市民權を有する猶太人として學者及思想家たりしのみならず彼は經綸、統御、手腕、實力、活動を兼備したる雄大なる事業家であつた。彼は事業家として、或る意味に於ける善良なる政治家として廣大なる事業を計畫し、困難なる天地を開拓し、破天荒の活躍をなした。彼は現世的、物質的、國家的、武力的の偉動を奏したのではなかつた。彼の事業は帝國主義の全盛時代に於て軍隊と法律と黄金の勢力とを以て世界を征服し萬民を統一せんと試みたのではなかつた。彼は是よりも一層高尚にして雄大なる基督中心主義を以て信仰、希望、博愛の勢力に由て人道と正義の目標なる基督の十字架の感化力を以て世界を信仰的に征服し人類を宗教的に救濟することを努めた。

古來羅馬人の民族的自覺は世界を征服して是を統御することであつた。古來猶太人の希望は萬民を救うて神の國を建設することであつた。しかし羅馬人の此自覺は政治的、武力的、侵略的、經濟的であつて何人も保羅の如く全帝國を宗教的、倫理的、人格的に征服して是を統一し基督中心の精神的大帝國を建設せんとしたる者はなかつた。又猶太人の此自覺は天來の救主に由て祖國の英雄ダビデの偉業を復興し聖都エルサレムを中心として萬國民を政治的、宗教的に支配することを期待して居たので

あつた。故に何人も保羅の如く彼の同胞血族のみならず希臘人も羅馬人も同胞兄弟として救はんと欲したる者はなかつた。斯くして保羅は基督の福音を以て羅馬帝國を敎化し正義と平和と神聖なる靈とに充實せる神の國を建んと試みた。彼は猶太の宗敎、希臘の文化、羅馬の政治を以て基督の宗敎の傳播の爲に意義深遠なる準備なりと考へたのであつた。彼は神の幽玄にして奥妙なる經綸を信じ羅馬を敎化することは世界を敎化する所以にして世界を敎化することは人類を敎化する所以なることを達觀して居た。保羅は民族的の偏見に支配せられ國家的の猜忌に熱狂せる猶太人と異邦人との墻壁を破壞し四海一家、人類同胞の主義を實現する爲に基督の十字架を證した。彼は、

『それ十字架の敎は
滅る者には愚なるもの
我儕救はるゝ者には
神の力たるなり』

と云ひ、又彼は、

『我は福音を恥とせず
此福音はユダヤ人を始め
ギリシヤ人
總て之を信ずる者を救はんとの
神の力なればなり』

と絶叫し。更に彼は、

『後必ずロマを見るべし』

と確信し、

『イスパニヤに赴かんとき』

との期待があつた。斯く保羅は傳道的眼界が實に廣大であつた。彼の敎區は全世界にして彼の羊は全人類であつた。彼こそ眞正なる世界的の事業家にして人類的の政治家であつた。斯くして彼は卓拔なる識見と高遠なる理想とを以て彼の宣敎運動を實行した。彼は是が爲に南船北馬し、幾多の迫害に耐へ、幾多の困苦と戰ひ、幾多の憂愁に打たれ、奮戰猛鬪して最後の勝利を得たのである。彼は眞に靈界の雄大なる事業家にして神の國の絶倫なる政治家であつた

第四　保羅は嘆美すべき德行家であつた

保羅は智識的に學者なりしのみならず實務的に事業家なりしのみならず倫理的に嘆美すべき德行家であつた。彼は律法を嚴守して理想の宗敎生活を實現せんとしたる猶太敎徒たりし時代より神の恩惠を